

# 書評

第106号  
1995. 4



●特集●  
読書案内

書評編集委員会

特集 ● 読書案内

『書評』編集委員会より	.....	4
法学へのきっかけ	.....	6
モンテスキュー著「法の精神」	.....	6
——「社会」の論理・「制度」の理論——	.....	6
文系学生のための数学的発想のススメ	.....	9
「山の人生」	.....	18
村田 尚紀 (法学部助教授)	.....	6
秋岡 弘紀 (経済学部教員)	.....	9
川端 康之 (商学部教員)	.....	15
永井 良和 (社会学部教員)	.....	18

寄稿

研究ノート (日本の法・政治思想史) ①	.....	21
林羅山の法・政治思想と幕藩体制(一)	.....	21

連載

在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート	.....	21
「民主・民族教育」の教科書	.....	26
おいてけぼり——宮本輝試論 X——	.....	44
日本中国ことばの来往 <small>ゆきやう</small> その51	.....	52
研究余滴 象徴主義 15	.....	60
終章 運動の終息	.....	60

羅針盤	.....	72
編集後記	.....	72

題字 ■ 網干善教 (文学部教員)

## 1995.4 羅 針 盤



「おれは、一体何をしているのだろうか」

震災後三日目にあたる一月十九日から開始された後期試験をうけながら、この台詞を何度つぶやいたことだろうか。一方で生き埋めになっている人が近隣に存在しているという事実を知りながら、答案用紙に向かっている自分が存在しているという矛盾。誰に言われるとでもなく沸き上がる後ろめたさ。この感覚を抱いたのは私だけではないはずだ。

学校法人関西大学は、学生の安否確認をすること、あるいは被災学生に対して、試験を含めてどういった措置をとるのかといった発表をすることさえ一切行わないで後期試験の開始を発表した。後期試験は、大学という機構にとって重要な要素であることは間違いない。しかしそれは、あくまで「大学にとって」なのである。この措置は、「大学の秩序を維持するために、震災についてはちよっとおいて、試験を行う必要がある」と言っていることに等しい。

聞くところによるとこんなケースが存在したらしい。ある社会学部の学生の親戚は神戸に住んでいて、その親戚から「水がないんや！頼むから水をもってきてくれ」という連絡が入った。その日は試験があるのだが、何と

かしなければと思ったその学生は、大学が被災者対象で特別試験を後日行うという発表をしたことを知る。そして、事務室にいつてこう告げる「神戸に水を持っていかなければならぬので試験は欠席しなくてはならない。特別試験があるようなのでそちらで受験させて欲しい」当然、了解されるべき話である。しかし、事務職員はこう答えた「君の気持ちはよく分かる。でも特別試験は被災者のための試験であるから、通常通り試験は受けて欲しい」反論するその学生に事務職員は折れようとしないう論すること自体の無意味さを感じたその学生は、そのまま事務室をあとにした。

また、経済学部に所属するある留学生に、英語の話せるボランティアが必要だという要請が入った。被災地で流される情報のほとんどは「日本語」の情報であり、「国際都市」をうたう神戸地区に居住する外国人は多く、日本語の話せない外国人たちの不便さ、不自由さ、不安は計り知れないものがある。当然その留学生はその要請を受けたいという意思を持つ。しかし、卒業のかかった試験が存在する。おおいに悩んだ結果、ボランティアの要請を断ることになってしまった。

こういったケースが多かったのだろうか。震災八日後

の一月二十四日になって「ボランティア活動等で受験できなかった人は申し出てください」という張り紙が社会学部の掲示板に張り出された。つまり、被災者以外の特別試験への受験も認めるということらしい。このことは毎日新聞でも取り上げられて、石川学長が「学生の熱意」に促されての措置であり「こういったケースは初めて」とボランティア活動に理解を示す学校法人関西大学ということが記事から読み取れた。しかし震災直後の一週間の重要性については、改めて言うまい。少なくともその一週間の間、大学当局は、「試験Ⅱ単位」を盾にして学生の自主的な救援活動を拒絶したという歴然たる事実が残った。

大学当局の試験開始については、いつになく学内のいたるところで議論が繰り広げられた。ある教員は「なにもこんなときに」と顔をしかめていた。一方で「大学なんだから試験を遂行することは当然の義務である」と譲らない人もいた。被災者あるいは救援活動をおこなう人への対応についても、いろいろな意見が噴出した。

「試験を行わなかったら、勉強してきた人に対して不公平が出る」「卒業見込者への単位はどうなるのだ」云々。

被災者のことは無視してよいなど思っていた人は、

一人もいなかったとは思ふ。しかし、絶対に忘れてはならないことがある。「大学は社会のなかに存在している」ということである。社会の構成員として日々、生活を営み、その中に存在する大学の構成員としての学生。

通常るときなら（試験期間でなかったら）一目散に神戸と赴いたはずの学生が足止めを食らった根拠は、試験Ⅱ単位（卒業）であったという事実は無視することのできないものである。

ここで、試験を受けなければならないという理由で、救援に行かなかったことを責めることができるのだろうか。「単位」が足かせになっていた背景に何が存在するのであるか。

そこでは、自己を社会的存在として位置付けて救援活動への参加を表明する学生と、大学を社会から独立したものとして位置付け、大学の秩序維持に固執した大学当局という構図が浮き彫りにされる。

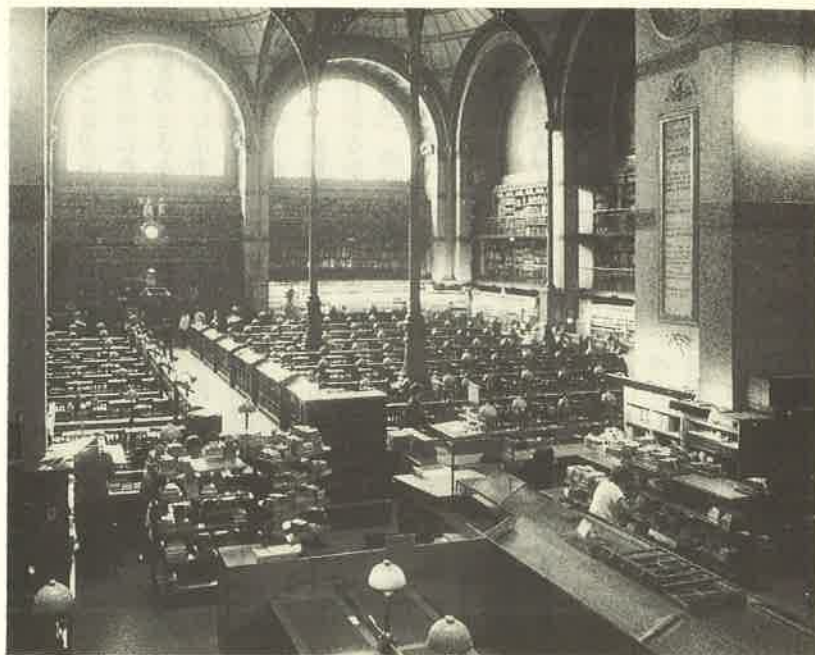
昨年、一九九四年十月一日に学長に就任した石川啓社会学部教授は、十一月二十八日発行の関西大学通信紙上において「学長就任にあたって」ということでこんなことを述べている『「大学を広く社会の各層に開放し、大学での成果を進んで社会に公開すると共に、社会の各層

からの声を直接聞いてそのニーズに答える」という本学の「開かれた大学」という教学方針をどのように展開していくべきかも大きな課題」といった上で「大学が積極的に社会の中に出てい」く必要性について説いている。

結果として、社会の中で積極的に行動を起こそうとしている学生の動きを（一定期間にせよ）止めた大学の責任は一体どうなるのだろうか。

今回の震災における大学当局の対応は一つの例に過ぎない。学生不在の中で学生を無視した大学当局の対応例などあげればきりが無いほど存在する。ここで「大学ってこんなもんだから」とか「私一人が何か言ったところでどうにもならない」と諦めては何も変わらないし、もし仮に今回のような事態に遭遇したとき同じようなことを大学に繰り返されてはたまったものではない。学生が主体的に社会的存在としての行動を起こし、それが大きなうねりとなったとき、大学当局はそれを無視することはできない。

なぜなら、大学の主人公は、事務職員でも、教育職員でも、ましてや石川学長でもなく、ほかならぬ学生なのだから。



## 読書 への誘い

新入生の諸君は、今までどれぐらいの本を読んできたのだろうか。諸君は今まで誰もがほぼ同じぐらいの時間を人生を歩むために費やしてきた。しかし、読書に費やしてきた時間は、ほぼ同じ年代の諸君の中でも、千差万別だろう。読書とは無縁で今まで生きてきた人、気晴らしに読書を楽しんできた人、あるいは読書とともに今までの人生を歩んできた人など、様々な読書との接し方があったと思う。

過去にいろいろな、読書との接し方をしてきた諸君(あるいは接してこなかった人も)の中には、大学生になったのを契機に読書に励もうとか、こんな本あんな本を読みたいとか、読書に対して様





● 読書案内目次

村田 尚紀	6
(法学部)	
秋岡 弘紀	9
(経済学部)	
川端 康之	15
(商学部)	
永井 和良	18
(社会学部)	

々な抱負があると思う。しかし、ただ本を読むという思いだけではなかなか読書に手が着けるものではない。今までよっぽど真剣に本と付き合ってきたか、読みたい本がよほど特定されてないかぎり、読む本を決めるのにあれこれ迷い、ともすれば本を「読まなければならない」という思いにズルズルと引きずられるばかりになってしまうかもしれない。そこまですれば、読書という行為は単なる苦痛以外のなものでもなくなってしまうだろう。

そこで、この「読書案内」で何か読書のきっかけを作りたい諸君に、読書に関する先輩である教員の方々が「お勧めの本」を紹介して下さったり、「読書とは何か」を各々の立場で説いて下さったりしている。この「読書案内」が諸君の大学生活における読書の第一歩となれば幸いである。

## 法学へのきっかけ 村田尚紀

むらた ひさのり  
法学部助教授

「読書案内」という特集で新入生と在学生に読んでもらいたい本を紹介してほしい旨の依頼を受けたが、私が適役とはとうてい思えない。仕事のために本を読んでいるけれども、私はけっして自分が読書家ではないと思う。私が学生の頃、よく「最近の学生は本を読まなくなった」と言われていた。私もそういう学生だったように思う。楽しいことはいっぱいあった。だから「なんてったって読書」と考えている本の虫なんてすでにまわりには一人もいなかった。

今の学生の読書生活はどうなので

あろうか。明確な根拠は挙げられないが、私が学生だった頃より、多分今の学生は本に関心を持っていないであろう。少なくとも活字に飢える思いをすることなどないであろうと思う。また別にそんな経験をしなければならぬわけでもないであろう。それでは、わざわざ押しつけがましい読書案内などやめてしまえばよいのか？というところ、やはりそこまではいえないように思える。本ばかり読まなくてもいい。本も読めばよいのだと思う。必要に応じて読めばよい。それ以上の読書は時間の無駄だ

と思えばしなくてよい。そのくらいのもりで本とのつきあいをほちほち始めればよいのではないかと思う。では、本を読む必要はいつどのようにして生まれるのか？それは、いうまでもなく、人によってさまざまである。生活のなかから必然的に生まれてくることもあるし、何気なく生まれてくることもある。この読書案内も誰かにとっては読書を始める偶然のきっかけとなるかもしれない。そうなれば、この雑文にもそれなりの意味はあったことになる。そこで、そろそろ本の紹介をしようと思う。

私には、法学部生あるいは法学に関心を持つ学生を対象にした読書案内をすることが期待されているのであろう。ここでは法学に興味を持つきっかけになるかも知れないものをいくつか挙げてみることにする。

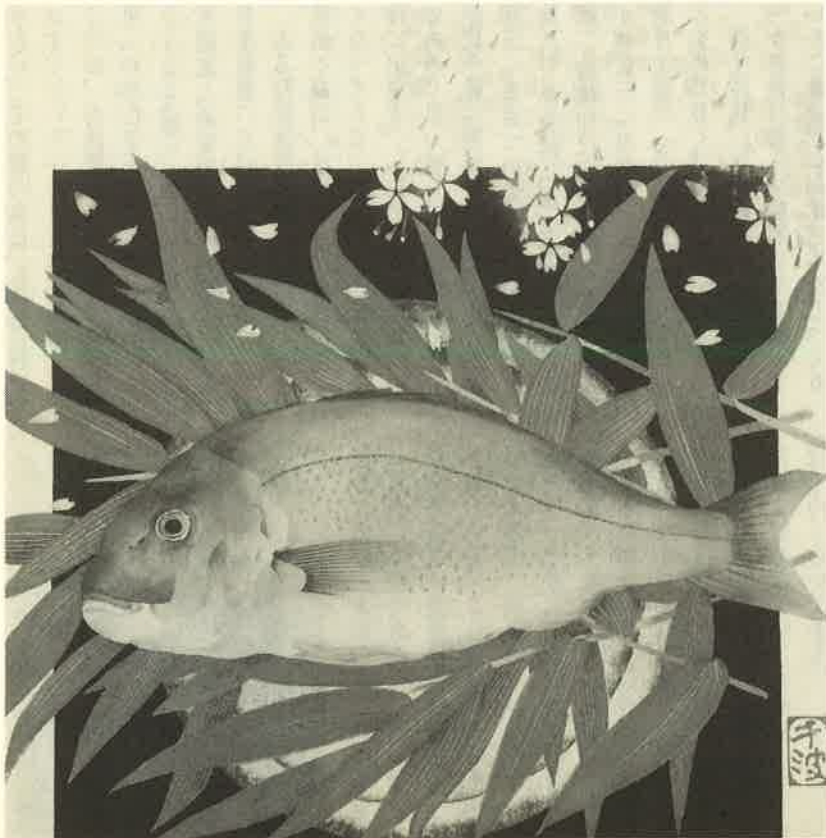
法学というよりも法学も含めた社



会科学への興味は、社会の現実を知ることから生まれてくる。今の生活にながしかのこだわりを持っている人は、少し考えてみると、その生活の土台がけっして安定しているわけではないことにすぐ気がつくであろう。入り口はなんでもいい。今こだわりを持っていることについてよりよく知るための読書を始めよう。

うまい酒が呑みたい人は、尾瀬あきら『夏子の酒』（講談社漫画文庫）を読んでみよう。それからちよっと古いが、三木義一『うまい酒と酒税法』（有斐閣新書）を読んでみるとを勧める。国民生活と法、行政との関わりがいきいきと理解できて、法学への興味が湧いてくるかも知れない。

阪神・淡路大震災は、一人一人が持っている世界と生活とが複雑で見えにくい社会関係の網の目の中に組込まれていることを痛感させる事件



であった。救済と復興に関するあらゆる問題に法の問題が絡む。法的問題を扱った書物も、今後ハウ・ツーものから原理的なものまで種々出るのであろう。それまでに読んでおきたいのは、石橋克彦『大地動乱の時代』（岩波新書）、尾池和夫『日本地震列島』（朝日文庫）である。文科系の者も一般向けの科学書には接しないと、自分の土俵でも戦えないことになりかねない。たとえば原子力、遺伝子、農業などの問題では一定の知識が欠かせない。

学生ならばたいの人は、卒業後の進路に何らかの不安を抱いていることであろう。最近、企業社会とか会社主義という言葉もかなり市民権を得ているようである。いつた日本の労働現場はどうなっているのか大いに気になるであろう。気にならない人は、気にしたほうがよい。これはお節介と言われても言ってお

きたい。その種の本は、本屋に行けばすぐにいろいろと目に止まる。ここでは、古典的なものとして斎藤茂男『わが亡きあとに洪水はきたれ』（ちくま文庫）、新しいものとして稲木建志『過労死とのたたかい』（新日本新書）だけを挙げておく。

ある程度法学に興味が出てくると、政治や裁判、法を扱った小説が面白くなってくる。勉強と気分転換が同時に出来る、一粒で二度おいしいのである。思いつくままに挙げると、伊佐千尋『逆転』（文春文庫）、佐木隆三『生きている裁判官』（中央公論社）、笹倉明『漂流裁判』（文春文庫）、高橋和巳『悲の器』（新潮文庫）、小林久三『皇帝のいない八月』（講談社文庫）。きりがなくなるのでもうやめておく。

学生時代、友人の多くが、卒業を一ヶ月後に控えて猛烈に本を読んでいたことを思い出す。本をじっくり



読むことが出来るのもこれが最後だと直感したのであろう。そんなゆとりを許さない企業社会がいま問い直されている。このまま続くはずはないであろう。続かせてはならないであろう。しかし、明日から急に改まる問題でもない。やはり自由に読書できる時期は今だ。このことを学生生活のなかでいつも頭の片隅に入れておいてほしい。繰り返しになるが、多読はしなくてよい。必要と思う本だけを読めばよい。私の言えることはそのくらいである。

モンテスキュー著「法の精神」  
——「社会」の理論・「制度」の理論——  
秋岡弘紀

あきおか ひろき  
経済学部教員

新入生諸君、「理論の殿堂」大学へようこそ！否、この「理論」という言葉は、諸君の高校までの学習課程においては、少々馴染みが薄かったであろうから、ここでは「理屈」と言い換えることとしよう。何となく、我々大学人が仰々しく用いている「理論」という言葉こそ、諸君が高校まで使っていた「理屈」という言葉が、そのまま「進学」したもののだからである。

さて、「読書案内」に入るのは、少しお待ち願うとして、ここでその「理屈」という言葉の定義をあらた

めて確認しておくこととしよう。我流の解釈で恐縮ではあるが、「理屈」(をこねること)とは、

- ・ある対象の『現実』(現状)を、
  - ・万人に納得\*させるべく、(\*「納得」の永続性は問わない)
  - ・筋道立てて、
  - ・普遍的に(現在・過去・未来あらゆるケースに適用可能なように)に
- 説明すること。」

すなわち、「現実に起こっている事象のしくみを、一般的に説明すること」と、私は理解している(もっ

と簡単に言えば、「多くの人に、『なるほど!』と言わせること」である)。

ところで、諸君の中には、この「理屈」という言葉に対して、何やら悪いことのような、いわばマイナーな先入観を持っておられる向きもあるかもしれない。しかし、これはとてもない見違いであって、真実は全くその逆である。ほとんど「理屈」はこねなければならぬのである(もちろん、その「理屈」が「正しい」ものであることが、大前提となる)。なぜなら、思い浮かべてみるとよい。あらゆる「理屈」が排除され、その対極たる「現実」のみが支配する世界を。「現実」に存在するものを、ただただ無批判に受け入れ、既成事実を追認するしかなすすべのない人々を。

悪政がはびこっていても「天下の御政道なれば致し方なし」、理不尽な社会的抑圧に苦しめられていても



「こういふきまりだから仕方がない、疫病の流行を前にして「病気には勝てない」……かくして、やり場のないフラストレーションだけは、確実に人々の心の深奥に蓄積されてゆく。

そしてそれが極限に達した時、魔女裁判といったような形で爆発するのだ。これは中世末期から近代初期にかけて、実際にヨーロッパで起こったことである。当時の人々には、疫病の「理屈」、すなわち病原体の存在など、もとより知るよしもなく、悪魔や魔女のせいにするしかなかったからである。まさに「理屈」なきところの悲劇といえよう。

実は、この「理屈」を生産し、補修し、以て社会に貢献することこそが、諸君の入学した大学というもの、数ある使命のうちの一つなのである。本学の研究活動を見ても明らかのように、各学部とも、それぞれの分野における新しい「理屈」を開

発すると同時に、従来の「理屈」の有効性を再検討することに日々精励している。法学部然り、工学部もまた然りである。：

ところで、前述のように、「理屈」をこねることに対して、諸君が一種の罪悪感を持っているとすれば、それは多分に幼き日の経験によること大であろう。例の「(子供のくせに)理屈を言うな」という、親や教師の叱責である。……だが、これこそ「理不尽」そのものである。なぜ「理屈」がいけないのか。考えてもみよ、仮に、その親や教師が、何らかの民事上のトラブルに巻き込まれ、裁判沙汰になったとしよう。この時、裁判官が、「何となく相手方の勝訴とする」などと判決を下そうものなら、彼(彼女)は怒りのあまりこう叫ぶであろう。「ふざけるな！ こんな理屈の通らない話があるか!!」

このように、世の中は、「理屈」

がなければ一日たりとも平穩には治まらぬのである。思うに、さきの親・教師の叱責の対象は、「理屈」をこねること自体ではなく、「口先ばかりで実行を伴わないこと」にあるのであろう。ここから転じて、「理屈をこねること」イコール「口先倒れ」という不名誉なレッテルを貼られるに至ったものと思われる（これでは「理屈」どころか「卑屈」である）。しかし、すでに見てきたように、本来の「理屈」というものは、「口先倒れ」などとは全く無縁の存在である。したがって、諸君は、これから胸を張って「理屈」をこねてよいのである。

さて、「理屈」の対極にある言葉として、「現実」を挙げたのは周知の通りであるが、この「現実」の中には、実は「人情」が含まれているのである。つまり、「人情」とは、人間関係において、「理屈（義理）」

で説明できない部分のことである。

今まで「理屈っぽくあれ」とさかんに勧めてきたが、これは、「全く人情味のない冷血人になれ」という意味ではない。それどころか、「理屈」を社会の骨格とすれば、「人情」は血肉であつて、この二つのバランスが取れていないと社会は成り立たないことも、また明白である。新入生諸君は、大学の講義から前者を、そして課外活動から後者を涵養すべきものと心得られたい。ただし、優先権は、まず前者（「理屈」）に与えられるべきである。なぜなら、骨と皮だけになつても、かろうじて立つことはできるであろうが、血と肉だけでは、それすら不可能だからである。「理屈」なき世界の行き着く先は、先に見たとおり、ただ混沌カオスの泥沼でしかないのである。

さて、非常に前置きが長くなつてしまひ申し訳なく思っている。「一体、

これのどこが「読書案内」か」という諸君の非難の声が聞こえて来そうなので、そろそろ本論に入ることとしよう。

冒頭の書は、一代の碩学にして古無双の思想家たるモンテスキュー（フランス人）が、一七四八年に出版した畢生の大著である。難関を突破して本学へ入学する榮譽を得た諸君であれば、本書および著者の名を、一度は聞いたことがあるであらう。

一般に、本書の功績は、立法・司法・行政のいわゆる三権分立論を唱えて、アメリカ合衆国憲法をはじめ、その後の近代国家の政治制度に多大なる影響を与えたこと、とされている。確かにそのとおりなのであるが、当該分野は私の専門外でもあり、本稿では敢えてその点には言及しない。この点について、より深い知識を得たい諸君は、本学のご専門の先生方の講義を受講していただきたい。

なぜ私が、「理屈」がいかに世の中で必要かという話を長々とした後、本書を諸君に勧めるのか。「理屈」と本書との間に、一体何の関係があるというのか。すでにお気付きの諸君も多かるうが（誰も気付いてないか）、実は、本書は、ありとあらゆる社会と制度に関する「理屈」の集大成となっているのである。その視野たるや、垂直軸においては、法律・政治の分野にとどまらず経済・宗教・はては習俗にまで及び、水平軸においては、はるか極東の一小国たる当時の日本にまで及び、時間軸においては、遠くギリシア・ローマの古いにしえに遡るのである。まさに前後左右・縦横無尽の形容が似つかわしい。その記述形式を単純化すれば次のようになる。

……こういう社会・こういう制度の背景にはこういう「理屈」があります。この「理屈」は、私（モンテ

スキュー）の証明では「正しい」（あるいは「正しくない」）ので、この社会・制度は「良い」（あるいは「良くない」）のです。このことは、次に示すように、世界のこの地域の例や、過去のこの時代の例を見れば明らかです。：

右の文の前半部分、すなわち「良い云々」までを、我々大学人は「理論研究」と呼ぶ。同様にして、それ以降の後半部分を「実証研究」と呼ぶ。理論（理屈）と実証の両立、見事なまでに、万事この論調で貫かれている。これぞ、私の最も強調したい点なのである。無論、本書の主旨は、先に述べた三権分立論にあるのではあるが、だからといって、これが本書のすべてであるという見方は皮相的に過ぎよう。なぜそのような主張を著者が提唱するに至ったかという、その過程にこそ、本書の最大の学問的意義があると思われる。単

に「主張」するだけなら容易であるが、その「主張」で万人を納得させることは全く容易ならざることである。すなわち、すぐれた「理屈」と実例とが、ここに必要となるのである。著者の三権分立論が多くの人人々に支持され、二十世紀の今日においてもなお、綿々と我々にその影響を与え続けているのは、これが、おおよそ考え得る実例をすべて検証し尽くした上で確立された、揺るぎない「理屈」にもとづく「主張」だからである。学問に対する著者のこのような姿勢は、むしろ法学・政治学の門外漢である我々にこそ、多くの示唆を与えてくれる。学問はかく行いたし。三権分立論はともかく、諸君には、そこに至るプロセスにぜひ注目していただきたい。三権分立制度や民主主義が「良い」ものであることは、今日誰でも知っている。だが、これらがなぜ「良い」のかという「理屈」





を整然と説明できる人は、恐らくあまりいないのではないか。これは、ある意味では憂慮すべき事態である。もし、これらの制度の否定を主張する者が現れた時、守るべき制度の「理屈」も知らずして、一体どうやってこれに反論しようというのか。一九二〇―三〇年代のファシズム（全体主義）の台頭を助長したのは、まさに、当時の人々の、このような「知的怠慢さ」であった。「理屈」なき

ところ、常に悲劇あり。新人生諸君は、このことを胆に銘じていただきたい。繰り返すようではあるが、大衆は「理屈の殿堂」である。その「理屈」入門としては、本書に勝るものはないと考える。

ここまで、話がやや抽象論に偏したきらいがある。そこで、本書の内容を、具体的に見ていくこととする。前に述べたとおり、本書にはありとあらゆる社会および制度の「理屈」

が収録されている。その中から少しかいつまんでご紹介しよう。

・立法権力（議会）は、選挙によって選ばれた多数の代議員から構成されるのが「良い」という「理屈」（第十一編）

……現代風にアレンジするならば、さしずめ「代議制議会」と、その議員数の「謎」である。

・執行権力（政府）は、逆に、一人のリーダーシップの下に、できるだけ少数の人間から構成されるのが「良い」という「理屈」（同右）

……「首相あるいは大統領の、一人制の謎」

・裁判権力（裁判所）が、固定されたグループに長期間掌握されるのは「良くない」という「理屈」（同右）

……「訴訟ごとの裁判官交代の謎」

・立法府は、期間を決めて召集され

るのが「良い」という「理屈」(同右)

……「国会会期の謎」

このように、普段我々が当たり前のことと感じている制度にも、それぞれ必ず「理屈」がある。また、その「理屈」が「正しい」からこそ、現代に至るまで、多くの国に受け継がれているのである(ちなみに、右記「理屈」の謎を解きたい諸君は、実際に本書の該当箇所を読んでいただきたい)。

一方、やや心もとない「理屈」も、少なからず述べられている。「どうだ、私はこんなことも知っているのだ。まいったかノ」式の、一見、知識のひけらかしのように思える部分がある。その中には、特定の宗教的戒律にまつわる「理屈」(第十六編)や、しばしば登場する「変な日本人」と、その習俗」など、我々現代人

の眼から見れば、明らかに誤解であると思われるものも含まれている。もっとも、当時(約二五〇年前)の交通・通信事情を考えれば、仕方のないことではあるが……。

最後に、本書より「究極の理屈」を選び出してみたので、ここに提示する。諸君に、ぜひ一読していただきたい。

「……自由とは、法律の許すべてをなす権利のことである。しかし、その法律自体の制定・運用・解釈が恣意的におこなわれるならば、もはや自由は存在しないに等しい。すなわち、自由は、権力が濫用されない時にのみ存在するのである。権力を濫用し得ないようにするためには、事物の配慮によって、権力が権力を抑止するようにならなければならない。誰も法律が義務づけていないことをなすように強制されず、また、法律

が許していることをしないように強制されないような国コンステイション制が必要とされるのである……。」(後記訳本第十一編より抽出し、編集したもの)

本書の刊行から二五〇年、この間に我々人類は、右記の「理屈」を論破するほどの「新しい理屈」を開発し得たであろうか……。

\* \* \*

モンテスキュー著 「法の精神」  
(フランス語原書)

Charles Secondat, Baron de Montesquieu "DE L'ESPRIT DES LOIS", 1748

(訳本) 野田良之他訳 上・中・下  
巻 岩波文庫 一九八九年  
上・中巻各七二〇円  
下巻七七〇円

評者のように文系学部で過ごしている、いまや「数学」などは遠い存在で、白紙答案と睨み合っていた大学受験時代の苦い思い出しか残っていません。しかし、この本を何気なく読んでみても印象に残りました。この本、タイトルは「秋山仁と算数・数学不思議探検隊」といい、東海大学の、というよりはあの秋山先生が監修をされ、東京都高等学校数学教育研究会・学習指導法分科会・不思議調査班という主に高等学校で数学の教鞭を執っておられる先生方が、小・中・高校生が算数や数

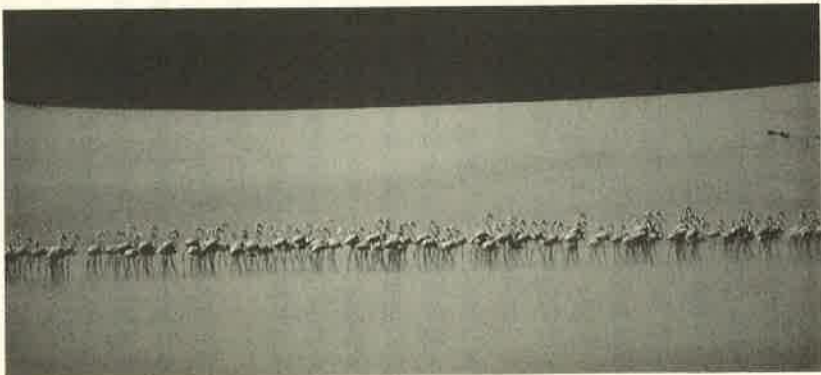
学で抱く疑問を集め、平易に答えることを試みたものです。取り上げられたトピック（というよりは数学の問題）は、たとえば、「0とは何なの」とか「0と1の間に無限に数があるの」、「どうしてマイナスどうしをたすとマイナスになるの」といった、基本的ではあるが、それだけに基礎的な疑問を取り上げ、その証明を行っています。

我々は数学の専門家でもないし、また「数学」の命題を解く必要に迫られているわけでもありません。ですから、ふだんの生活でこの本の内

## 文系学生のための 数学的発想のススメ

秋山仁監修都数研・不思議調査班編  
「秋山仁と算数・数学不思議探検隊」  
(森北出版)

川 端 康 之  
かわばた やすゆき  
商学部教員



容にかかわるようなことに直面することはないといいてよいでしょう。しかし、この本は、我々文系の人間にも多くの示唆を与えています。

まず第一に、問題解決のための論理的道筋を立てることが重要であることを示しています。この本で取り上げられている問題にはいずれにもどのように考えればよいのか、それも、一つの解法だけでなく複数の解法によって同じ結論になることが示されています。それは、自然科学の分野においてのみならず、社会科学の分野においても、問題解決が複数の方法によって可能であることを示唆し、我々に多様な発想が必要であることを突きつけているといえるのです。

第二に、「概念」の重要性を示しています。たとえば、「ゼロ」という数を表現する概念が、ただ単に「無」を表す場合と「空位」を表す

場合があることを文字列の表記という点から導き出しています。いうまでもなく、ゼロの概念は我々にとつて極めて重要で、そのおかげで現在の社会が成り立っているともいえます。その他の例においても、同じように概念の論理的展開がわかりやすく示されています。私たちが日常用いている「概念」は、ともすれば、万人に共通のものであると錯覚しがちです。たとえば、「企業」という概念にどのような意味内容を与えるかは、おそらく「定義付け」という



作業を行わなければ、同じ「言葉」を用いても人によって千差万別ということにもなりかねません。そこで、我々は定義を定めることで認識の共通化という作業を行っているわけです。このような意味で、「概念」に着目する必要があります。

余談ですが、評者が定期試験で学生諸君の答案を採点する際に最も気になるのがこの点です。学生諸君の答案の多くでは、鍵となる用語についての定義付けもなく論述が展開されています。学説によって定義の異なる論点について、自身が前提とする定義とは異なった論旨展開を行い論旨が論理矛盾に陥っている例もあります。さらに、答案自体が論理的展開をしておらず、論述のはずが読書感想文になっているものも多くみられます。また、さまざまに「概念」を抽象化して論じることもし手ではありません。このような根本的な問

題点は、学生諸君が論理の展開に不慣れであること、論理的つながりを言葉で表現することが不得手であることなどを理由としているのでしようが、何よりも、高校までの学習段階で、与えられた練習問題を解くだけの算数や数学を苦手としていたことに理由があるのではないかと、評者は考えています。

文系学生の多くは、数学を知らなくとも文系科目の学習研究に支障はないと考えているようです。しかしこれは間違っているでしょう。数学上の一定の命題を証明するという作業は、いわば言葉で表現される論理を抽象化し、演算という共通の約束事の上で行われる論理の展開です。それは、論旨展開の基本的枠組みを極めて端的に表現しているといえるでしょう。また、数理経済学が普及した今日では、経済学という社会科学の一大分野では極めて頻繁に数学

の応用が行われています。しかし、そこで行われていることは本来言葉で表現し得る論理の展開を極めて端的に表現する一種の思考省略に過ぎず、高等数学を用いているからといって何も偉くありません。大切なのは経済数学に辟易することでも、公式を暗記することでもなく、それを用いて証明しようとする問題対象が何であるのかをしっかりと見据えることなのです。

数学を受験科目としてしかとらえないのは、さまざまな分野で要求される論理的思考や発想の多様性をモデル化した重要な分野に目を背けることになるでしょう。評者は、高校の科目のうちで、特に数学と歴史(日本史、世界史など)は思考力を養う上でこの上ない分野だと思っています。数学や歴史が(?)と思われるかも知れませんが、いずれも論理的展開を重要視するという点で共通して

います。数学的発想が大切なのは、このような分野に限らず、法律学においても、経営学の分野においても同じです。論理の展開を、まさに論理矛盾なく端的に展開するという作業を会得するには数学的発想を重要視してほしいと思います。この「秋山仁と算数・数学不思議探検隊」は、大学生にとっては簡単に過ぎるかも知れませんが、しかし、論理的に思考することの重要性を想起させるという点では、難解な専門書にも勝っているといえるでしょう。我々が数学に取り組むことは、中世ヨーロッパのキリスト教全盛の時代に古代ギリシアの研究が進んだように、一神教の世界で多神教の価値の多様性を学ぶことに似ています。受験の数学ではなく、思考訓練としての数学を知る絶好の機会として、特に文系学生には是非とも一読されることを期待しています。

## 『山の人生』

永井良和

ながい よしかず

社会学部教員

都市社会学

大衆文化論専攻

今では記憶している者が、私のほかには一人もあるまい。三十年あまり前、世間のひどく不景気であった年に、西美濃の山の中で炭を焼く五十ばかりの男が、子供を二人まで、鉞まさかりで斫り殺したことがあった。

女房はとくに死んで、あとには十三になる男の子が一人あった。そこへどうした事情であったか、同じ歳くらいの小娘を貰って来て、山の炭焼小屋で一緒に育てていた。その子たちの名前はもう私も忘れてしまった。

何としても炭は売れず、何度里へ降りても、いつも一合の米も手に入らなかつた。最後の日も空手からてで戻って来て、飢えきつている小さい者の顔を見るのがつらさに、すつと小屋の奥へ入って昼寝をしてしまった。

眼がさめてみると、小屋の口いっぱい夕日がさしていた。秋の末の事であつたという。二人の子供がその日当りの処にしゃがんで、しきりに何かしているの、傍らへ行ってみたら一生懸命に仕事に使う大きな斧おのを

磨みがいていた。阿爺おぢぢ、これでわたしたちを殺してくれといったさうである。そうして入口の材木を枕あおむにして、二人ながら仰向けに寝たさうである。それを見るとくらくらとして、前後の考えもなく二人の首を打ち落としてしまった。それで自分は死ぬことができなくて、やがて捕えられて牢ろうに入れられた。

この親爺おぢぢがもう六十近くなつてから、特赦を受けて世の中へ出て来たのである。そうしてそれからどうなつたか、すぐにまた分らなくなつてしまった。私は子細こまごまあつてただ一度、この一件書類を読んでみたことがあるが、今はもうあの偉大なる人間苦の記録も、どこかの長持の底で蝕じじばみ朽ちつつあるであろう。(柳田國男『山の人生』・ちくま文庫版による)



# 『書評』編集 STAFF募集!!



十九歳の頃だったと思う。通学の電車のなかで、この文章に出会った。衝撃を受けた。周囲の喧噪は、私の意識から失せていた。活字に、力を感じた。

柳田國男という人が書いたものをいくつか読んでみようと考えたのは、民間伝承に興味を惹かれたからだ。そして、一冊の岩波文庫を買った。『遠野物語・山の人生』である。目当ては彼の代表作「遠野物

語」のほうで、そちらから読んだ。

もちろん「遠野」は「遠野」で、期待を裏切らない素晴らしい作品だという感想をもった。しかし、私の感動はその先に潜んでいた。

ほんの「ついで」に読みすんだ次の作品「山の人生」の冒頭は、私の心をつかんで、今なお離さない。私とはときおり文庫を出してきて、この小品を読みなおす。そして、最初の出会いと同じ感動と、それとは少

しちがった印象とを、そのたびにいだく。

同じ本のなかに、どの作品と、どの作品とを合わせておくかというところが、編者や、あるいは出版社の見識を示す。代表作「遠野物語」と、強い個性をもつ「山の人生」とがひとつの書物をなしていたことは、私にとつてかけがえのない意味をもった。岩波書店と、この文庫の解説を書いた桑原武夫に対して、私は大き

『書評』は私たちによる文化形成のための印刷メディアです。あなたも『書評』を創ってみませんか。

『雑誌』に興味のある方、思想・文化活動をやりたい方は、『書評』編集をはじめ、講演会や映画上映のSTAFFになつてみましょう。

私たちは、いつでもあなたをお待ちしています。

★連絡先 〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎ 387-9998 (直通)

☎ 388-1121 (内線 4821)

な借りがある。

もし、私の手にした本が「遠野」

だけを収めたものだったら、「山の人生」との出会いはなかったか、あったとしてももっと遅れたはずだ。

十九歳の、あのときに出会ったからこそ、私は柳田と長くつきあうことができたのだと思うし、もし出会わなかったとすれば、「偉大なる人間苦の記録」が「どこかの長持の底で蝕ばみ朽ち」たところで知るよしもない。「長持」の存在にさえ気づかず、今日のこの日までを過ごしてきたのではないかと思う。本との出会いは、人との出会いと同じように偶然であり、そうだからこそ貴重である。

最近読み返してみても、気になるくだけがある。これも、私の心に刺すようにささって容易に抜けてはくれない。さきの炭焼の男について書かれた部分のあとに、もうひとつの挿話があつて「山の人生」の第一章は

閉じられるのだが、その最後に次のようにある。

我々が空想で描いてみる世界よりも、隠れた現実の方がはるかに物深い。また我々をして考えしめる。これは今、自分の説こうとする問題と直接の関係はないのだが、こんな機会でないと思ひ出すこともなく、また何人も耳を貸そうとはしないから、序文の代りに書き残しておくのである。

一冊の本を書き、それに序文を添える、たいていの著者ならば、その本の目的や、出版にいたるいきさつなどを披露するはずだ。そこに柳田は、「自分の説こうとする問題と直接の関係はない」エピソードを書きつけた。炭焼男のような「埋もれたる人生」である。柳田は、いったい

何をいわんとしているのか。あるいは、いおうとしていえなかったのだろうか。

十九歳ではじめて「山の人生」を読んで、十五年が過ぎた。これからの十五年で、この新しい疑問を、すなわち「山の人生」の序文の意味を考えていきたい。

※柳田國男の著作は、現在ちくま文庫版の全集で読むのがもっとも便利である。「山の人生」は、第四巻に収録されている。ほかに、岩波文庫版もある。脱稿後、内田隆三「柳田國男と事件の記録」（講談社選書メチエ）が出版された。本稿で扱った柳田の文章については、刺戟的な分析が一冊になっている。内田の論考の前で拙文はあまりに粗雑だが、読書案内という趣旨にてらし、手を加えずにおく。

## 林羅山の法・政治思想と幕藩体制(一)

蘆田東一

### なぜ林羅山か

林羅山は、江戸幕府に召し抱えられた最初の儒者として有名であるが、その思想にはそれほど関心が持たれてはいない。その理由は、とくに羅山の思想というものはなくて、羅山の著作が中国朱子学の忠実な紹介にすぎないとされてきたからであり、また、粗述された朱子学そのものが、前近代の東洋哲学のひとつの典型と考えられていたからである。すなわち自然秩序と社会と人の秩序とが連続しており、そこに主体たる人と自然との断絶を前提とした、主体的人間としての思惟あるいは、政治的思惟の優位といったようなものはなく、自然と人間が連

続している、東洋的停滞社会の世界観にすぎないと考えられていたのである。それは、後に古文辞学派によって克服されるべき中世的宇宙論的秩序の表現にすぎないと解されていたからでもある。つまり、羅山の著作活動などは、徂徠などが登場し活動する舞台装置に過ぎないと考えられているかのようであった。

ところで、いま、羅山の「法・政治思想」というのは、羅山の思想から支配についての思想を抽出してみようと思うからである。実は、林羅山は、儒学を、たんなる教養としてではなく、支配のための理論としても意識的に展開した日本の最初の儒者でもあるからである。

注① 丸山眞男 『日本政治思想史研究』三五頁

注② 丸山前掲 第一章

注③ 船田亨二 『法思想史』（全訂版・昭和四三年）では、

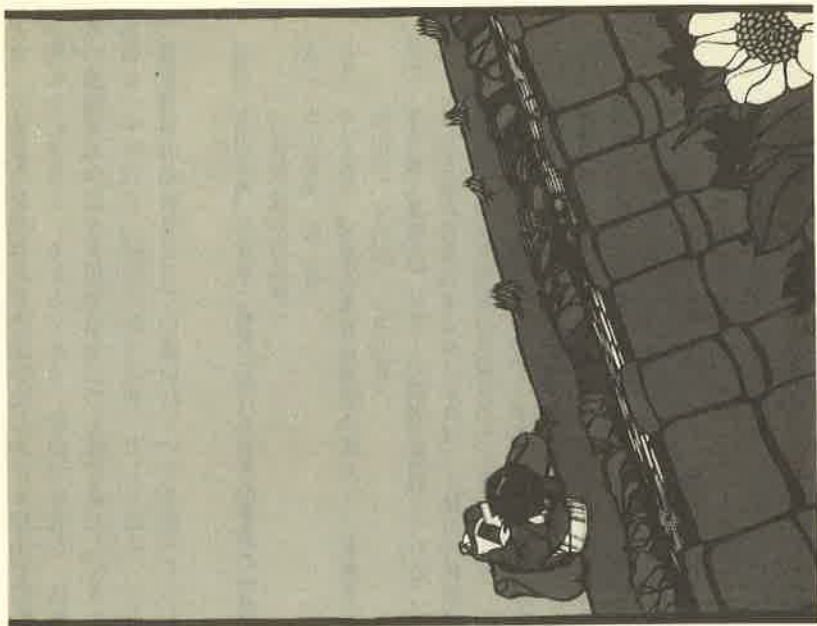
法思想は「現実の法秩序の形成について、これを多数の法学者ないし法哲学者の理論的に構成し表現しようとする思想、また、かような法秩序の形成や法学説の出現によって変化し変遷する思想を指し、法思想とは、かような思想の歴史を指す」とする。

### 羅山研究の傾向

上記のように、朱子学では政治的秩序は自然的秩序と未分離のものとし、それに対する、「作為的契約的秩序思想」を荻生徂徠の言説に読み取り、そこに「政治的思惟の優位」を読み取り、日本の近代的な思想の先駆を見たのは、若き丸山眞男氏であり、又、奈良本辰也であった。丸山氏が、もっぱら、徂徠に近代的政治学的思惟を読み取っていた時には、朱子学は、克服されるべき中世的自然秩序思想であり、羅山の言説は、日本における単なる粗述に過ぎなかった。

丸山眞男氏の言い方では、羅山は「その言説は全く朱子の忠実な紹介を出でない」人であり、「畢竟思想家であるよりもむしろヒブリオグラーフであった」というふうに認識されていた。





しかし今中寛司氏は、林羅山は多くの著書を編み教学上多くの事績を残しながら著書は概して粗雑であるという批判があるが、その粗雑さは、精巧で煩瑣な中国の朱子学に忠実でないという非難を含んでいるのだ、とされ、「林鷲峰が編集した『羅山編著書目』」によると、羅山は経書や子類の仮名抄や諺解、さらには教訓仮名抄等、口演体の仮名書き通俗書を数多く著作している。それらは確かに粗雑で、時には中世先哲の四書仮名抄の文章をそのまま借用しているが、その大胆さの反面、却って羅山の独自の思想や意図が鮮明に表現され、中国思想をよく消化している場合が多い」とされている。今中氏は羅山を中国朱子哲学の啓蒙的な紹介者としてみるのではなく、むしろ、徳川幕府の儒者として、新しい制度と理念の創設に努力した実務家としてみることから、羅山研究を推進されている。今中氏は羅山学の前提を室町期の思想にまで及ぼされている。つまり、羅山の思想を「古文辞学」の前提としてのみ見るのではなく、むしろ儒学史の発展過程として見ているのである。

羅山の思想については、ほかにさまざまな言及があるのに、特に丸山氏と今中氏を挙げたのは、丸山氏の研究が特に羅山に焦点をあてて書かれたものではないにも係らず、影響力も大きく、しかも通念に合いやすいからで

あり、今中氏の研究は日本の儒学史における羅山の段階が明らかにされているからである。羅山の思想が、銘経家の清原家の学問や吉田神道などを経て成立してきた過程を、今中氏は「羅山の教学思想」として述べ、一方で儒家神道の創始者としての羅山についても述べている。

注④ 丸山前掲、奈良本「近世における近代的思想の発展」

(近世封建社会史論)

注⑤ 丸山前掲 四二頁。

注⑥ 今中寛司「近世日本政治思想の成立——惺齋学と

羅山学」三六四、三六五頁。

注⑦ 堀勇雄「林羅山」は多くの問題を提起している。す

なわち堀氏自身のまとめによれば「(1)羅山の新説講義に対する清原秀賢の抗議は事実であったこと。(2)

家康が羅山を重用して儒学を奨励したり、また羅山の生前に幕府が朱子学を正学として他の学派よりも優遇したようなことはなかったこと。(3)国家安泰の鐘銘批判をめぐる家康の大阪に対する開戦工作において、羅山が果たした役割は、崇伝や天海と比較しても大したものではなかったこと。羅山の俸祿が晩年になっても一千石に達しなかったことが表徴する如く、その幕府機構における地位・役割は、文教・外交顧問というような重要なものではなく、その博

識と文筆の才を買われたにすぎなかったこと。(5)羅山の日本古代史研究、特に泰伯皇祖説は日本思想史上から高く評価されるべきであること」などの指摘をなされている。林羅山の評価について、史料の実際との懸隔を指摘し、改めて、古代史研究史上の羅山にも光をあて、新しい羅山像を提出されようとしたものである。たしかに多くの啓蒙的な意味を持つ数々の指摘であるが、朱子学としての儒学の幕藩体制における意味は、羅山の職名・俸祿で軽減されるものではなく、羅山の思想が幕藩体制に関係した意味も軽減されるものではない。しかし、堀氏の指摘は、羅山の思想と幕藩体制についての問題を考えるための土台を提供されたという事である。さらに、羅山の思想についての研究は、のちに触れる相良亨氏、和島芳男氏、衣笠安喜氏の研究がある。

### 羅山の法・政治思想からはじめる理由

こうして見ると、むしろ羅山こそが、「中世的世界観」に対決した人である可能性がある。そうだとすると、林家学の中世的世界の秩序を看取し、それに対決する徂徠学の契約的近代的政治的思惟という対決構図は、全面的に成り立たなくなる。

しかし、ここで、林羅山の思想に「近代的な政治学的



「思惟」を読み取るべきだといっているのではない。林羅山において、日本儒学は、貴族や僧侶の教養的訓詁学的性格を脱した。徂徠学に「近代的な政治学的思惟」あるいは「政治的思惟の優位」見いだすなら、それはもう羅山にその思惟のその程度は兆しているのである。尤も、徂徠学は、後記水戸学の「国体論」の成立に貢献しており、その国体論的思想は明治以降の日本の思想に深刻な影響を与えている。それは確かに「民族的情念」とでもいうものを呪術的観念から生み出したのである。徂徠学は、その呪術的観念の醸成に貢献している。それは、一見正のエネルギーとして理解される面もあったようであるが、実は、日本における合理的な思考を今猶蝕んでいるのである<sup>⑧</sup>。

そうすると、いま幕末・近代の法・政治思想を見通した上で羅山学の成立を検討する観点が得られそうである。清原家流の訓詁学や藤原惺窩のまだ仏門の教養主義的性格を保持した儒学を脱却したのは羅山であり、現実の支配関係の中で儒学への思想的生命を吹き込もうとしたのである。徂徠学に「政治的思惟の優位」を見たとしたなら、それはたかだか荀子風の権力的功利主義的なものであり、法家思想家によって権力的な展開がされたことがあるものであって、取り立てて言うほどのものではない。

法・政治思想史としてみれば、羅山学によって開かれた地平をそう越えはしていない。

羅山は、教養主義的訓詁学を脱却した上に神道を組み込むことによって、「民族的」展開を果たした。それは徂徠学の呪術の復興と連係も果たしているのである。

注⑧

戦前・戦後の国体論争は言うに及ばず、様々な祭儀をめぐる議論が、今なお法廷でおこなわれている。

この問題について、最も対立しているのは伊藤仁斎である。

(あしだ　とういち・神戸山手女子高校)

# 「民主・民族教育」の教科書

——在日韓国・朝鮮人子女の教育問題ノート 21

梁 永厚

人がその祖国を批判することは、国家にたいする奉仕と敬意を意味している。批判は祖国の現状をより良い方向に駆りたてうるから、奉仕となるのである。また祖国が現状以上のことをなしうる存在であるという確信の表明であるがゆえに、敬意を意味している。

(J・W・フルブライト)

このノートの連載について、北朝鮮系の在日団体に属している人たちのなかから、「民主・民族教育への誹謗中傷である」といった反発の声が伝わってくるので、弁

明として冒頭のことばを引かせて頂いた。

そもそも在日韓国・朝鮮人子女教育のスタートである「国語講習会」(一九四五年、終戦まもなくより始まる)から、学校体制への移行(一九四六年)といった在日同胞の自主的な教育建設⇨創生運動にはじまる十年間は、在日同胞自身のトータルな教育要求、即ち「民族教育」の具現を軸にした教育運動であったといえる。

その「民族教育」は、北朝鮮系の在日団体・朝鮮総連が結成されてのちは、本国の教育政策にのっとり「国籍のある教育」、いわば「教化」(思想教育)を第一におくようになった。つまり「民族教育」の換骨奪胎が行なわ



れだったのである。したがって時を経るほどに在日同胞の「民族教育」離れが進行し、最盛期には五万名を越す児童・生徒を擁していたが、いまは一万五千名程度に落ちこんでいる。こうした現状を憂い、批判し、提言までを執筆予定にいられているノートであることを明らかにしておきたい。

さて今回は、日本と韓国の国交を開く交渉・日韓会談が、急進展（一九六四―六五）していく情勢下、一方の北朝鮮は「社会主義」陣営の経済援助をうけ、それをもとに「千里馬」運動を誇示していた。それを背景として勢いづいていた朝鮮総連系の学校は、どんな教科書を用い、どんな内容の教育をしていたかについてとりあげようと思う。

日韓会談が急進展していたときに開かれた朝鮮総連の第七回大会は、「民族教育」について、「われわれの教育事業は、在日同胞に民族的な誇りと希望を抱かせる崇高な事業であり、同時に学生たちを通じて父兄たちまでも教育する愛国事業です。われわれの教育事業はまた、われわれのつぎの世代に先進的な科学知識を習得させ、わが国の愛国伝統と文化を教えることにより、かれらを立派な愛国者に、祖国建設の頼もしい働き手に育てあげる仕事です」と、祖国へ帰っても、在日であって

別表1 初級学校(小学校)カリキュラム

番号	学科目		総時数	学 年						
				1		2	3	4	5	6
				1	2					
1	国語	国語	1,606	12	9	9	9	7	6	6
		会話	170			1	1	1	1	1
		作文	136				1	1	1	1
2	社会		204	1	1	1	1	1	1	1
3	歴史		136						2	1
4	地理		136						2	2
5	算数		1,156	5	5	5	6	6	6	6
6	自然		306					3	3	3
7	日本語		570		3	3	3	3	3	3
8	体育		408	2	2	2	2	2	2	2
9	音楽		408	2	2	2	2	2	2	2
10	図工		408	2	2	2	2	2	2	2
計			5,644	24	24	25	27	28	31	31

有効な教育を、といった目的定義をし、それに基づくカリキュラムを別表1〜3のように定めている。

別表3 高級学校(高等学校)カリキュラム

番号	学科目		総時数	学 年		
				1	2	3
1	国語	文法	68	2		
		国語	510	5	5	5
		作文	68		1	1
2	社会		136	1	1	2
3	朝鮮歴史		204	2	2	2
4	世界歴史		136	2	2	
5	朝鮮経済地理		68			2
6	世界経済地理		68		2	
7	数学	代数	544	3	3	6
		幾何		2	2	
8	物理		204		3	3
9	化学		170	3	2	
10	生物		102	3		
11	地学		68			2
12	日本語		306	3	3	3
13	外国語		374	3	4	4
14	体育		204	2	2	2
15	音楽		34	1		
16	家事 製図		102	1	1	1
計			3,366	33	33	33

別表2 中級学校(中学校)カリキュラム

番号	学科目		総時数	学 年		
				1	2	3
1	国語	国語	612	6	6	6
		作文	102	1	1	1
2	社会		102	1	1	1
3	朝鮮歴史		204	2	2	2
4	世界歴史		102		3	
5	朝鮮地理		102			3
6	世界地理		68	2		
7	代数		272	2	3	3
8	幾何		204	2	2	2
9	物理		136		2	2
10	化学		68			2
11	生物		170	3	2	
12	日本語		306	3	3	3
13	外国語		306	3	3	3
14	体育		204	2	2	2
15	音楽		136	2	1	1
16	美術		136	2	1	1
17	家事 技術		136	2	1	1
計			3,366	33	33	33

さらに朝鮮総連が一貫して唱えている「民主・民族教育」について、東京にある朝鮮大学校附設の民族教育研究所の朴尚得所長は、「民主主義ということとは、独立国家の在外公民としての民族的自覚と誇りをもち、世界の人びと、とくに在留中の日本のかたがたとの友好・親善を深めるような教育をすることであります」。「民族教育とは、母国語である朝鮮語で書かれた独自の教科書でもって、朝鮮人教師が、朝鮮語と朝鮮文字で朝鮮人子弟を教えることでもあります」（『在日朝鮮人の教育』ありえす書房）と、だれからも共感をひく解説がなされている。

これら「民族教育」の目的主義、カリキュラム、「民主・民族教育」の解説の額面通りに、実際の教育はなされているのだろうか。一九六〇年代の朝鮮総連傘下の各学校では、主として民族科目と呼ばれる「国語（朝鮮語）」「社会」「歴史」「地理」を中心に、全科目を通じて、資本主義国家の諸制度、政治、経済などの欠陥、矛盾を指摘し、それを非難するのと対照に、社会主義陣営とそれに属す祖国の政治・経済・文化の優越性を強調・讚美し、金日成を祖国の領導者、社会主義陣営の抜きん出た指導者と称え崇拜させるとともに、社会主義国家相互の支援協力関係を「プロレタリア国際主義」として自讃していた。さらに北朝鮮の現状と南朝鮮の「惨状」に結びつけて、



北朝鮮主導の祖国統一を強調していた。そして教科書は、初級学校から高級学校まで、すべて朝鮮総連中央本部教育部（現在は教育局）特設の「教科書編纂委員がつくり、北朝鮮政府教育部の批准即ち検閲を受けて、学友書房（朝鮮総連系学校の教科書、成人教育教科書の発売元）が発行していたものを用いた。ではその教科書の内容の一端をみていくとしよう。



初級学校（小学校）・国語（一九六五年、学友書房刊）

一年生

題 お会いしたい元帥さま ※金日成のこと

元帥さまの写真は いつ見てもうれしい

わたしたちがいつも お会いしたい元帥さま

星光のような眼で、 わたしたちみな、よく学び

書を咲かせば おほめ下さるであろう元帥さま、

題 人民軍隊

人民軍隊のおじさんは、英雄おじさん

アメリカの奴を撃ち負かした 英雄おじさん

わが国を固く守り、輝やかせたおじさん

二年生

第三課、弟を可愛がられた元帥さま

……略

元帥さまは、幼ない弟を連れて遊びながら留守番をしました。柳の笛をつくってふいてやりながら、楽しくお遊びになられました。そして、お乳を飲ませるときがくると、幼い弟を負って、お母さまをたずねていかれました。





第三二課 こわがり兵士

アメリカ奴の兵士 こわがり兵士  
のつばの歩哨 まぬけな歩哨

……略……

アメリカ奴の歩哨 まぬけな歩哨

偵察兵に捕えられ うんうん

人民軍隊に捕えられて うんうん

三年生

第十一課 元帥さまの懷に抱かれて

……略……

元帥さまにおかれては、そのようにお忙がしいなか  
においても、私の誕生日をお忘れにならず（一緒に撮  
った写真を）送って下さいました。

「金日成元帥さま ありがとうございます」と、私  
は何回も心の中であいさつをささげました。

第三十八課 かわいそうな兄妹

暗い南の地（注、韓国）には、涙ぐましい話しが、  
本当に多いです。このかわいそうな兄妹にたいする話  
は、その中の一つです。

……略……

四年生

第十一課 砂袋

……略……

バルチザンにはいると、毎日敵と戦わなければなら  
ないために、文字を習う時間がありませんでした。

……略……

このとき金日成元帥におかれては、隊員たちに文字  
は金のある者だけが学ぶか、学校でのみ学ぶものでは  
なく、敵と戦いながらも、よく学ぶことができる、と  
お教えになりました。

……略……（砂袋を持たせ、余暇をみては、それを

広げ、文字の練習をさせるようにした、という話）。

第十五課 祖国の懷に抱かれ

ある日、母はジョンイリを負って、日本で名高い東  
京大学附属病院をたずねた。

診察を了えた医師は、母をみて「まず三十万円はい  
りますね……」と言った。

……略……

ジョンイリは、祖国の懷に抱かれて治療をうけ、初  
めて自分の脚で立つようになった。これをみた母は夢



かと思つた。しかし夢ではなかつた。ジョンイリは祖国の恵みの中で、力強く、自分の脚で歩きだしたのである。

五年生

第九課 異国暮らしをするようになった話

……略……

第二次世界大戦の時期にも、日本帝国主義者たちは炭坑で、地下飛行機工事場で、わが同胞を手当り次第に虐殺しました。

また「長野松代」の「地下大本営」工事、鹿児島県「バンセイ飛行場」工事等、秘密軍事施設工事に朝鮮労働者を引き連れてきて、使うだけ使つては秘密が漏れることをおそれて、みな虐殺をしました。

……略……

第二十六課 懐かしい友よ、南の友よ

懐かしい友よ、南（韓国）の友よ

新しい日が明ける 統一の新らしい日が千里馬の勢いで駆ける われらが父母兄弟

労働の結実で、その日を引き寄せる

ああ 懐しい友よ、南の友よ

首領（筆者注、金日成）さまが、導びいて下さる 祖国統一の一路へ

腕をまくり、駆けていこう

新しい日が明けてくる

……略……

懐かしい友よ、南の友よ

アメリカの奴を追いだすために、起て、たたかえ、ぼろを着ることに飢えを知らない われらの社会

五角星旗（筆者注、北朝鮮国旗）の下、跳びはねながら育て

ああ 懐しい友よ 南の友よ

手に手をとりあって、一途に駆けている

父母兄弟についていこう

新しい日が明けてくる

六年生

第十八課 私は歩哨所に立っている

……略……

私はアメリカ帝国主義・仇敵の汚ない靴を踏み  
じられてゐる南の地を、射抜くように見つめている。

……略……

今日もアメリカの狼たちは、血に染った銃剣を振り  
かざしながら、抗争の炎の中で起ちあがった南のわ  
が兄弟を撃ち殺し、幼い子供の胸に銃をつきつけて  
いる。この激憤を、如何に耐えることができるか。

……略……

第四十課 卒業を前にして

……略……

祖国とは何であり、また、その貴重な祖国のため  
に、十五星霜も吹雪の舞う白頭山を往き来しながら、  
敵と戦い勝利された金日成元帥さまの革命闘争歴史  
を教えてくれる祖国研究室！

……略……

私はただただ祖国の真の働き手になるために、少  
しの間も心を緩めず、学習に一層励げまねばならな  
い、と心に誓った。



以上は一九六五年版の初級学校（六歳から十二歳までの初等教育）の国語教科書における金日成を称え崇拜へ導く教育、北朝鮮社会や技術（医療）の自讃、日本帝国主義、アメリカ帝国主義への非難、韓国の民衆生活の惨状、祖国統一運動への呼びかけといった内容の一端である。その日本やアメリカ非難の件りでは、事実をとりあげる分には当然であるが、極端な誇張表現と事実の歪曲、さらにアメリカの奴、日帝（日本帝国主義）ノムといった教科書用語を、多用していることについては首肯しがたい。

初級学校だけでは、紹介が十分でないと思うが、紙面の都合もあって、高級学校二年で用いた『世界歴史』（一九六五年版、学友書房発行）から、昭和初期の恐慌、日中戦争、敗戦に至るまでの内容の要点を次にあげることにしよう。



一九三七年七月七日、日本帝国主義は中国を自己の植民地に転換させ、中国人民を奴隷化するための大規模的な侵略戦争を挑発した。この時から中国人民の英雄的な抗日民族戦争が開始された。戦争が始まるや共産党は、直ちに紅軍と南方各地に残っていた遊撃隊たちを八路军と新四軍に再編して華北と華東戦線に出動した。

しかし売国的な蒋介石集団は、「消極的抗日と積極的反共」の背信的路線を一貫して実施した。

蒋介石の売国的行為を利用した日帝侵略軍は、北京、天津、上海等を占領した。（四三頁）……

第一次世界大戦のとき、ヨーロッパ列強が戦争に没頭していた時に、日本帝国主義は中国と太平洋地域で自分の地位を強化したし、戦争と関連して軍需工業を急速に成長させた。日本支配者階級は、戦争を利用して莫大なカネもうけをした。戦争期間に三井銀行の資本は当時の貨幣で二千万円から一億円に、住友銀行は一千万円から三千万円に増加したし、その他の財閥らの資本も幾倍かに増加した。

しかし、日本の勤労大衆と植民地住民たちは、日帝の苛酷な搾取と虐待によって、ぼろをまとい飢えきつた。（六九頁）



一九二三年九月一日に東京と横浜地方で大震災が起った。関東震災は数万名の犠牲者と当時の貨幣で六十億圓に達する物質的損害をもたらした。革命運動の高揚に不安を抱いていた日本の反動統治輩らは大震災を利用して共産党員たちと多数の革命的労働者の大衆的逮捕と殺害を敢行したし、在日朝鮮人民に対しては野獸的に虐殺した。(六九頁) ……

日本の統治集団は、人民のあらゆる自由と民主主義的権利を奪う「治安維持法」を公布した。この悪法はなによりもまず、「赤い思想」を弾圧するという名目の下に労働運動および民主主義運動に対する警察的弾圧とテロ的攻撃を強化するところにその目的をおいた。悪名高い「治安維持法」によって多数の共産主義者たちと民主主義者たちが逮捕された。……

日本支配階級は恐慌からの出路を侵略戦争に求めようと試図した。当時の日本首相だった田中は一九二七年「天皇」における「上奏文」で膨大な侵略計画を提起した。この秘密覚書で日帝は、満州、中国、蒙古等全アジアを支配すべきであり、そのためにはソ連を侵略しなければならず、太平洋での支配権を掌握するため米國との軍事的衝突も不可避なことだろうと指摘した。



田中の「上奏文」は対外膨張のための日本帝国主義の悪名高い侵略綱領になった。日帝は直ちに、この侵略計画を実践する犯罪的な行為にとりかかった。……

日本帝国主義者らは対外侵略を強化するに先立って、まず民主力量に野獸的弾圧を加えた。

日本帝国主義者らは一九二八年三月全国的に数千名の共産党員たちと、その支持者たちに対する大衆的逮捕を敢行した。しかし未曾有の迫害と警察テロも共産主義者たちを屈服させられなかった。共産党の活動はすぐ復活した。このとし四月末に早くも共産党機関紙「アカハタ」が再び発刊され始まった。

奸悪な日本反動は一九二九年に、また再び一万名以上の先進的な労働者、農民たちを逮捕投獄してファッショ的裁判を行なった。

日本帝国主義者は経済恐慌から脱け出すために、対外政策をより露骨に推進させた。

国内のファッショ化と共に、対外侵略戦争挑発の危険は増大していった。これと関連して日本労働者たちは、一九三一年八月一日を戦争反対の日と決定した。この日労働者たちは「帝国主義戦争に反対する!」「植民地の完全独立のために!」というスローガンの下に強力な反戦示威を断行した。

階級闘争の高揚に怯えた支配階級は、ファシズム化と侵略戦争で出路を求めようと決心した。経済恐慌時代とその後数年間に日本ではファシズム宣伝が強化されて、ファシスト組織等の数が急速に増加した。ファシスト団体等は労働者、農民たちの革命運動を流血的に弾圧し、侵略戦争を積極支持し、植民地民族解放運動を野獸的に弾圧することを自分の課業とした。……

日帝は太平洋戦争の進展につれ、北部中国を侵略戦争の重要後方基地にしようとしてながらより大規模的な攻勢をとった。しかし、共産党領導下の抗日武装力量は、日帝軍隊の「包圍攻撃」を粉碎して敵どもを掃滅した。

一九四五年三月までに人民解放軍は大小十一万五千余回にわたる戦闘で日帝侵略軍とかいらい軍九六万を殺傷して五二万を捕虜にしたし、一〇万余名を投降させた。

全国大多數の重要都市、交通路と海岸線はみんな人民解放軍の包圍の中におかれるに至った。中国人民解放軍は、日帝侵略軍隊に決定的打撃を与える準備を整えた。かように、中国共産党の領導下に中国人民の抗日戦争は、日帝を撃滅して中国人民革命の勝利を成就するところにはもちろん、第二次世界大戦の勝利を保



## 投稿募集!!



障するにあたっては巨大な寄与となった。(六九頁)  
日本帝国主義者らは長期戦を企図していた。米帝国主義者らは一九四六年にはいったら日本本土へ上陸できらるうと打算した。  
日帝を撃滅して世界大戦を一日も早く終結させる問題は、ソビエト武力の参加なしには解決し得なかった。ソ連政府はヤルタとポツダム会議決定に従って一九四五年八月九日対日戦争に参加した。  
ソビエト軍隊はチカバイカルから太平洋にいたる全戦線で大規模的な攻撃戦を開始した。ソ連軍隊の勝利的進撃にあわせて中国人民解放軍も総攻撃に移って

った。(九四頁)

第二次世界大戦で日本帝国主義が敗亡したことによって日本人民は、多年間の軍国主義とファシズムの悪どい統治から解放されるにいたった。(一九九頁)

さて授業であるが、それは朝鮮総連中央の教育部によって、科目別に策定された「教授要綱」に従い、教員が作成する「教授案」によって進められた。一九六五年版の『社会科学教授要綱』（初・中・高共用）には、はじめに「社会科学教授要綱、解説」として「社会科学教授の目的と内容」が、次のように示されている。

### 短評を書いてみませんか？

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれにせひ人にも勧めたい、または、強く印象つけられた本の短評を原稿用紙(四百字詰)二、三枚に。

★ジャンルは自由、締切は毎月末。

★連絡先 千565吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

「書評」編集委員会

☎387-9998 (直通)

☎388-1121 (内線4821)

われわれの学校の教育目的は、次代の青少年にたいし、先進的な科学技術を習得させ、わが国の愛国伝統と文化を教えることよって、かれらを立派な愛国者に、祖国建設の頼り甲斐のある働き手に育てることにある。この目的を達成するにおいて、社会科の教授は、愛国主義教養を総体的に進行し、高尚な道徳品性を教養するところに、重要な意義をもっている。

(1) 社会科教授の目的と内容

社会科教授の目的は、学生たちをして、金日成元帥を限りなく尊敬、仰慕し、首領（金日成）に学び、首領とともに祖国と人民を熱烈に愛する愛国者として教養するところにある。

また学生たちを栄えある祖国——朝鮮民主主義人民共和国を熱烈に愛する精神で、祖国の自主的平和統一と在日同胞の民主主義的民族権利を擁護するために、すべての力を捧げ闘う精神で、朝鮮総連の諸般の愛国事業へ積極的に参加する精神で、高尚な道徳品性の所有者に教養するところにある。

この目的を達成するための社会科教授の基本内容と課業は（以下、筆者による要約）、



- ① 祖国の社会主義制度が愛する精神で教養
  - ・資本主義制度の本質を教え、これを増悪させる。
  - ・資本主義制度と対比しながら、社会主義制度の優越性を認識させる。
  - ・社会主義は必ず資本主義に勝つという確固たる信念をうけつける。
  - ・われわれが目指す社会を具体的に知らせる。
  - ・金日成が領導する祖国を限りなく愛し、祖国と金日成に忠実ならしめる。
- ② 愛国伝統の教養
  - ・金日成をはじめとする抗日バルチザンがたどった道を具体的に学ばせる。
  - ・愛国者の闘争の業績を教え、その伝統を継承させる。
- ③ 反帝国主義思想の教養
  - ・帝国主義の侵略的な本性を歴史的に暴露し、その悪らつさ、残忍性を理解させ、帝国主義は全世界人民の共通の敵であり、わが人民の敵であることを明確にさせる。
  - ・世界反動の元凶であり、祖国南半部を強占（注、占領）している米帝に反対する思想を養う。
  - ・帝国主義の手先である現代修正主義の本性を暴露



する。

④ 自力更生の愛国精神の教養

・愛国伝統の学習を通じて、いかなる困難をも克服し、ついに勝利を達成した抗日パルチザンの愛国精神、自力更生の精神を体得させる。

・祖国の社会主義建設の成果、とくに自力更生の愛国精神のもとで収めている成果を知らせ、その生活力を体験させる。

⑤ 未来を愛する精神の教養

・よりよい明日のため、闘争するように教える。

⑥ 高尚な道徳品性の教養



・学習を不断に行ない、祖国の平和的統一のため朝鮮総連の愛国事業に協力させる。

教授案の作成は、学友書房が発行した教員用参考書に拠って行なわれた。社会科学の参考書が手許にないので、『歴史参考書』から、一例をみよう。

初級六年『朝鮮歴史』

5、祖国解放戦争（筆者注、朝鮮戦争）

第四〇時

22 祖国解放戦争のはじまり

I 目的

(1) 朝鮮戦争を起した凶悪な犯罪者は、まさに米帝であることを明確に認識させることによって、かれらを憎悪する精神で教養する。

(2) 朝鮮人民の偉大な祖国解放戦争は、侵略者から自己の祖国を守るための正義の戦争であったことを認識させる。

II 授業内容

……略……

三年間の祖国解放戦争で、朝鮮人民は輝かしい勝利を得た。帝国主義の頭目・米帝と戦い、勝利したことによって、朝鮮人民は自由と独立

のために戦う全世界人民の模範となった。朝鮮人民の勝利は決して自ずと得たものではない。

それは全体人民が、金日成元帥の周囲に固く団結し、その方の英明な領導を奉じて戦ったこと

によって得た勝利である。朝鮮人民はどうして、

このように一つに団結することができ、悪辣な米帝国主義を屈服させることができたのである

うか？ それは朝鮮人民の胸のなかに、抗日遊撃隊のように祖国を守るために戦うという血の

たぎる決心が固ったからであり、また自己の手

に主権を握り、民主改革を通して真の人民の社会の幸福を味わったからである。朝鮮人民は、

また帝国主義の奴隷となるよりも、命をかけて

敵とたたかうことを願ったからである。

偉大な祖国解放戦争にたいする授業を通して、

朝鮮人民がどのように困難に打ち勝ち、自己の

祖国を守るため英雄的に戦ったかを、生き生きと

と学生たちに認識させるようにすること。……

(略、筆者)

△ 朝鮮人民は戦争を願わなかった。

……略(筆者、以下同じ)

△ 戦争を起したのは米帝である。



△ 朝鮮人民は正義の戦いに起ちあがった。

……略……

III 板書 ……略……

IV 資料 ……略……

といった具合に詳細に指示をしている、この参考書についての評は外すことにし、一九六五年度の大坂朝鮮高級学校の入学試験問題の一部をあげ、今回のまともに移ることにする。



### 試験問題

#### ① 「社会」(朝鮮中級学校出身者)

一、次の問に答えよ。

1、朝鮮民族は悠久で輝かしい歴史をもっている。祖先が創造した文化遺産のうち、世界に誇りうるものを五つ以上あげよ。

2、わが国の歴史で、祖先が他国を侵略したことはない。祖先は外敵の侵略があるたびに、祖国と民族の榮譽を守って勇敢に戦った愛国伝統を残してくれた。

次の各時期にどんな愛国先烈がいたか。三名以上の名前をあげよ。

(一)三国時期 (二)高麗・李朝時期 (三)十九世紀後半

3、朝鮮人民の敬愛する首領金日成元帥は、いつ、どこで生まれ、その家庭環境はどうであったか。

二、米帝は朝鮮人民の不倶戴天の敵であるということを、十九世紀後半期の歴史的事実によって説明せよ。

三、次の質問に答えよ。

1、朝鮮総聯の正式名称はなにか。

2、朝鮮総聯は何日に結成されたか。

3、朝鮮総聯は何をする団体か。

#### ② 「日本語」(同前)

一、下線の部分を漢字はひらがなに、ひらがなは漢字に書き改めよ。

あいこくしんとは、そこくの過去をよく知り、自己の民族がもっているゆうしゅうな伝統と文化、ふうしゅうをよく理解してこそ生まれるものです。(金日成)

「国土りようだんはすべてのひげきのこんげんである。」と南朝鮮のしゅつばんぶつも書いていごとく、民族ぶんれつと二十年にわたるアメリカ帝国主義の植民地しいは、南朝鮮人民に文字どおり、「史上初有」の民生苦をおしかぶせている。米帝は極東とアジアのいたるところで恥ずべき惨敗をくり返し、進退兩難の窮地に陥いるや仮面をぬぎすてて、犯罪的な(韓・日会谈)を公然と直接指揮し、その早期妥結を露骨に強要している。

さて、在日の北朝鮮系学校教育、即ち「民主・民族教育」は、一九五〇年代の後半から今日まで、その内実をあまりオープンにせず<sup>に</sup>きている。たとえオープンにしたとしてもオープンに包んだもので、実態とは大いに乖離しているといえる。昨年<sup>の</sup>春、「朝鮮学校の教科書



が順次改編され、日本の実情に合った内容になりつつある」と、『朝日新聞』が報じていたので、改編された教科書の現物を見たいと思ひ、同紙の記者に問い合わせたところ、改編教科書の公開はまだなされていまいとのことであった。報道通りなのか、その動向は注目に値する。

朝鮮総連は「民主民族教育」の権利を、世界人権宣言、国際人権規約、子どもの権利条約等の教育関係条項を引



いて主張するが、条項には権利規定の前段と教育内容規定の後段がある。いわば「すべての人は教育を受ける権利を有する」「親は、子に与える教育の種類を選択する優先的権利を有する」といった権利規定と「教育は、人格の完全な発展並びに人権及び基本的自由の尊重の強化を目的としなければならない。教育は、すべての国又は人種の若しくは宗教的集団の相互間の理解、寛容及び友好関係を増進し、かつ、平和の維持のため、国際連合の活動を促進するものでなければならない」という教育内容を規定している。

後者には教育内容の現時点でのありように加えて、「国際連合の活動促進」といったことが示されているが、それは普遍的正義を示したものとはいえない。いわば国際社会の秩序を保つための「次善」的といえる活動であり、「大國」または「多数」の論理を背景にしているものと考えられる。だが国際社会の一員であろうとするならば、国際的な教育内容規定を守る現実主義に立って、「民主民族教育」の過去と現在を顧りみ、改めるべきは改め、どこからも疑念を持たれないオープンな教育事業を定立していくべきではないか、という思念の表明をもって今回のむすびにかえたい。

連

載

# おいてけぼり

— 宮本輝試論 X —

芝田啓治

十二、「おいてけぼり」その社会に対して

## (1) 社会について

私達人間は、自然環境と社会環境の中で生きていっているものなのである。そして、その事実から一步もはみだす事は出来ない。しかし、私達は自然環境に関して実際に見たり、触れたりして実感可能なのに対し、一方の社会環境なるものはなかなか厄介な代物と呼べるだろう。それは、実感する事が極めて難解なのである。社会とは人と人との関係と呼ぼうが、人と人との結合と名付けようが、残念ながらこの手に把んで実感し難いものなのである。



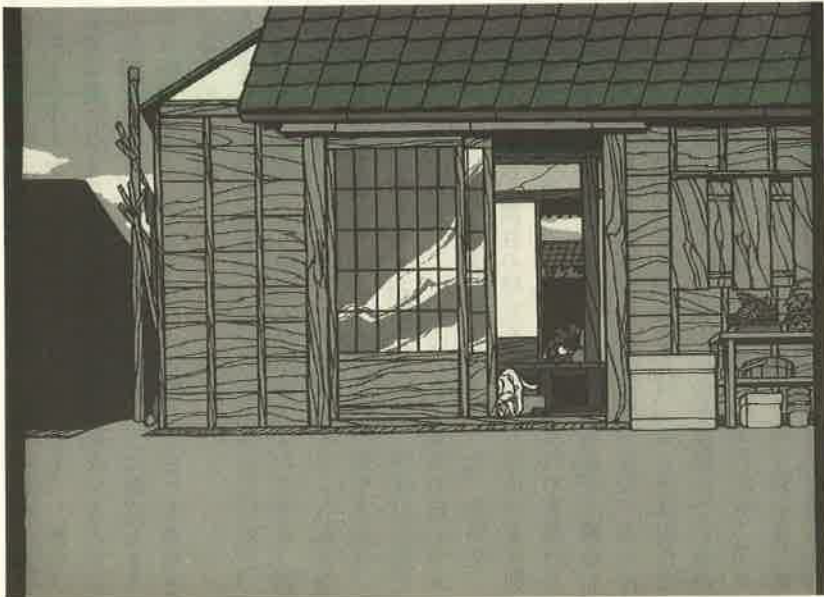
又、その関係の持ち方も千差万別、人によってそれぞれ  
なのであり、その事が一層難解なものとしている。

「社会」とは一体何なのか。どう付き合えばよいのか  
という事に誰しも疑問を抱き、迷い、そして躓き、傷付  
く。時には理解し得たり、手の届かない所へ行つてしま  
つたりと。又、この手に把もうと改革を志してもそう容  
易に出来ず、ただその大きさだけを知るとどまつたり  
と。特に、若者にとっては難解な代物なのである。

「社会」とは、「社で会う」と書く。「社」は「やしろ」  
と読み、辞典によれば「やしろ」とは、一つの集団が共  
同にまつる耕作の土地の神、又、集団共同の祭から転じ  
て、集団体をも「社」という。豊作を願ひ、豊作を祝う。  
大地の神なのである。そして、村の祭りの日に村人達が  
会合する場なのである。村人の共通の願ひや、喜び、時  
には苦難や災難を共に神の前に跪くのである。更に、仲  
間や世間といった意味合いをも持っている。

今、日本経済に対する諸外国からの目が厳しくなり、  
時としては鋭い批判の目が向けられている。「日本株式  
会社」と称されているのもその一つであるが、ここで言  
う会社も社会と同意味なのである。一つの共通の目的を  
持つて集う集団なのである。

そう言えば、社会という意味の英語は、societyであ



るが、明治時代の初期の訳では会社と訳されていたそうだし、フランス語の *société* にも同様の事が言える。これらの語源はラテン語の *socius* から来ているらしいが、意味は仲間や友、そして話し相手だそうである。日本語もラテン語も、そして英語・フランス語・ドイツ語に至るまで、社会というのは同じ意味を持っていると思われる



る。しかし、語源を探ってみても、やはり、実態は依然としてこの手の中には入って来ないのである。しかし、社会が人間に与える影響たるやばかり知れないものがある。如何に背こうが、距離をとろうが、又は順応しようがやはり社会から一歩たりともはみだして生きる事など出来ないのである。

高橋宏氏が「病氣と社会」という本を著しているが、病いも社会的要因により決定される所大なのである。歴史的にみて、ギリシャ・ローマ時代は城壁により町を強固に囲んで防備に当っていた。そのため不衛生となり、ペストが時代の主流をなす病いとなった。中世に入ると度重なる十字軍の遠征により、もともと熱帯の病いであった癩病が一気に欧州を席捲する事となった。次いで、古い宗教観からの人間性の解放を謳歌したルネサンス期に入ると梅毒が流行した。又、十八世紀近代の幕開けとなる産業革命が成功すると、一気に産業構造が工業化し、大気を汚すことにより結核が一世を風靡するのであった。そして、今二十世紀はどうかと言えば、特に先進国などでは文明病と呼ばれるものが我々の心身を蝕んでいるのである。豊かすぎる食生活、工業社会ゆえの水質汚濁に大気汚染、そして過度のストレスにより癌や動脈硬化症、気管支炎などとその範囲も広い。又、二十一世紀はエイ

ズの時代と呼ばれており、病氣も時代や社会と深く関係しているのは事実である。

今ここで、もう少し現代病の主因のひとつストレスについて考えてみたい。この世にも不思議な代物は、より現代社会との関連性が強いものと言えよう。社会の急速な変化に対する戸惑い、都市化や文明・機械化に振り回され、複雑な人間関係によって自己のコントロールが出来なくなる。又、既成観念が崩壊し自らの位置が見えなくなる。我々はこのようなストレスの中で暮らしているのであり、より一層このストレスなるものは現代社会の中で成長し続けているのである。このような自己の外の問題が因となる場合と、自己の内に因がある場合とがある。それでは、内なる問題とは一体何であろうか。我々は「かくありたい」という理想志向と「かくある」という現実との狭間で躓き、傷付くのである。この問題は、現代社会を生きる我々の固有のものではなく、いつの世も悩まされているものなのである。様々な要因が絡まり合って、より一層現代社会を生きる我々のストレスを増長していると言えよう。

ここでは、作家がこの難解なる「社会」をどう考え、どう挑み、どう理解していくのかを考えてみたい。



(2) 「反社会」——石川啄木の場合——

反社会の位置に立った作家としては、その代表として石川啄木と太宰治とがあげられよう。彼らほど社会に対して抗い、悩み、そして傷付いた作家も少ないであろう。太宰治が生まれた明治四十二年というのは、西暦一九〇九年、世は桂園時代の真っ只中。第二次桂太郎内閣の時



期で、桂太郎と言えば元老山県有朋の後継者で長州陸軍閥。かなり強権的な政治を展開した人物と言えよう。彼が一次組閣の時、一九〇四年に日露戦争を断行。二次では、日露戦争後の経済発展に伴って個人主義・浪漫主義を生み出し、又社会主義が台頭する動きに対して、それを抑えるため上下一致と儉約とを説いた極めて封建的内容を持つ戊申詔書なるものを発している。その強権的姿勢は韓国との間にも見られる。一九〇四年に締結された第一次日韓協約に始まり、第二次・第三次とより強化していったのもこの時期であった。

この頃、石川啄木は既に青年期を迎えていた。

反社会の立場をとる太宰治と石川啄木とはあるが、全く異質と言える面もある。それは、太宰の反社会は観念的であったのに対し、啄木のそれは余りに現実的であった。生活者としての貧困、労苦の果てに辿り着いた立場であった。

石川啄木は、明治十九年（一八八六年）の生まれで、太宰より二三歳上となる。太宰が青森生まれに対し、啄木は隣接する岩手県。共に東北の貧しい農村に生まれ育った。啄木の父親は曹洞宗の僧であり、住職を務めていたため決して裕福とは言えないまでも、人並みの家庭で育った。彼は洪民村の小学校では首席、期待を一身に受



けて盛岡中学へ。しかし、早熟の啄木は文学・恋愛に走り、学業が疎かになり、二度のカニンク事件を起こし、卒業まで後半年とせまった五年生の秋、退学をしている。この蹟きは、その後学歴に対するコンプレックスとなり、深く啄木の心を痛めた事は推察出来よう。

「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ

花を買ひ来て

妻としたしむ」（石川啄木「一握の砂」）

啄木の「おいてけぼり」感は、これ以後一層強くなっていく。中退して直後、啄木十六歳。筆一本で身を立てようと決意し上京するも、世間の波は荒く、貧困と失意



のうちに病いに倒れ、父に伴われて帰郷するのであった。錦を飾るところではなく、自らの甘さと世の激しさ、厳しさを感じての帰郷であった。

「ふるさとこの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな」(同)

明治三七年、啄木十八歳の時、父が宗費滞納のため、住職罷免の処分を受け一気に石川家の前途に暗雲を来たす。翌年、啄木は結婚し、自ら定職もなかったが、老父母、妹、そして妻を扶養する立場となり、重荷が双肩にかかって来る事となった。借金人生がスタートするので



ある。二十歳の時、洪民尋常小学校の代用教員となる。月給八円であったが、教育に真剣に取組むも一年と少しで退職。

「石をもて追はるるごとく

ふるさとを出でしかなしみ

消ゆる時なし」(同)

その後、北海道に渡り函館区立弥生小での代用教員、函館日日新聞の記者、北門新報社の校正係、小樽新報、釧路新聞社と一年足らずの間に職を転々と変えている。

しかし、文学への想い断ち切れず、再び意を決して上京。「明星」「スバル」等で活躍。明治四二年、東京朝日新聞社の校正係として採用される。月給二五円。しかし、當時既に一三〇〇円を越す借金をかかえていた。

「はたらけど

はたらけど猶わが生活楽にならざり

ぢっと手を見る」(同)

「わが抱く思想はすべて

金なきに因することし

秋の風吹く」(同)

この数年間は、金銭や家族問題に追われ、心身共に極度の疲労の内であった。そして、彼が得た決論は如何なるものであったのか。彼は二つの事件に心を強く打たれ、

突き動かされていると言えよう。一つは、明治四二年十月、伊藤博文が安重根という韓国青年によって、ハルビン駅頭で射殺されたことであった。

「我は知る、テロリストの  
かなしき心を——

言葉とおこなひとを分ちがたき

ただ一つの心を、

奪はれたる言葉の代りに

おこなひをもて語らむとする心を、

われとわが身体を

敵に擲<sup>な</sup>げつくる心を——

しかして、それは真面目にして熱心なる人の常に有つ  
かなしみなり。」(同「はてしなき議論の後」)



この事件の翌年、日本は韓国併合をなし、以後三六年に亘り植民地支配したのである。この時、日本は世界の歴史の中でも類をみない支配方法をとった。それが「七奪」と呼ばれるもので、「王・土地・米・生命・名前・人間・言葉」と。ありとあらゆるものを、人間としての基本的人権に関わるものさえ奪ったのである。名前や言葉を奪うなど尋常を逸している。その事は、社会的弱者の立場にいた啄木にとつては身を切られる如く辛いものであったと言えよう。その理不尽なる日本の支配方法に腹の底から怒りを覚えたに違いない。そして、その歩みを単なる感情論や一般論でない地点で受止めたのである。更に、もう一つの事件とは、併合がなされた年と同じ明治四三年の大逆事件であった。大逆罪とは、大日本帝国憲法下の刑法七三条に規定されており、天皇・太皇太后・皇太后・皇太子・皇太子孫に対して危害を加えた者、加えようとした者を死刑に処すというもので、この時明治天皇暗殺計画の容疑により社会主義者・無政府主義者ら二六名が起訴されたのであった。四名の者は容疑を認められたが、それ以外の者は否認のまま裁判が行われ、最終的には十二名の死刑が執行されたのであった。一部冤罪の可能性が高いとされ、その死刑宣告を受けた者の一人が幸徳秋水であった。その事は、啄木に大きな衝撃を与

えたのである。

「明治四十三年の秋わが心ことに真面目になりて悲しも」(同「短歌拾遺」)

学歴によるコンプレックス、生活者としての悲哀、家族の重さを通して、病弱の身体に鞭打って歩み続けた啄木は、この頃一つの結論に辿り着いている。

「僕は必ず現在の社会組織経済組織を破壊しなければならぬと信じてゐる。」(同「瀬川宛の書簡」)

「私の生活は矢張現在の家族制度、階級制度、資本制度、知識売買制度の犠牲である。」(同「歌のいろいろ」)

更に、自らの所信の上に立って活動をしたいとも表明しているのである。それは、土岐哀果と共に雑誌「樹木と果実」の発刊を計画し、啄木の歌を主に発表する場ではなく思想表現の場として考えていたのである。しかし、その準備に当るも、遂に無理がたたり入院生活を送らざるを得なくなり、「樹木と果実」は創刊号すら出せず、中止となっている。筆によって社会に挑もうと企てたものの、結局果せない啄木の落胆ぶりが伝えわかって来よう。

「友も妻もかなしと思ふらし——  
病みても猶、

革命のこと口に絶たねば。」(同「悲しき玩具」)

啄木にとって、十六歳で盛岡中学を中退してから、世



を去るまでの十年間は、貧困・父親の失跡・転職・家族による重責感・失意・闘病と重ねているうちに社会が見えて来たのである。自分にとっては、破壊しなければならぬ壁として、「おいてけぼり」を喰って来た弱者が遂に敵対する社会を見出し、挑戦しようとして試みたのである。しかし、この壁として存在した社会から啄木が得たものは、結局貧困と慢性腹膜炎と結核であった。「冬の時代」と呼ばれる明治の晩年、社会に対して挑み、傷付き、そして倒れていったのが啄木であった。

「ことさらに燈火を消してまぢく」と革命の日を思ひ続ける」(同「短歌拾遺」)

(しばた けいじ・本学経済学部卒業生)

連

載

# 日本中国ことばの来往ゆきまき

## その51

芝田 稔

### 「蘇武牧羊」の歌

曾て「蘇武牧羊」という中国の小学唱歌があつた。これは極めてポピュラーな歌として広く愛唱されていたのであるが、今それを思い出そうとしている。

ちようど六十年前、一九三五年頃のことである。ところは撫順、炭坑の現場事務所。そこに中国人の「シエン・シオン」（先生）会社的一般事務を司る事務社員を指している）が一人いた。彼は元小学校教員というだけあつて、私が毎日接している中国人の中では、ただ一人の「識字人」（シーツォー・レン）漢字をよく知っている人で

あつた。

彼は、中国語を覚え始めて間のない私にとって、正に小学校の先生であり、私はその新入一年生となつた。テキスト等持ち合せのない私は、毎日現場の中国人から聞き覚えてくる新しい言葉——それは現場作業中に必要であると感じた事物の名称ばかりであつたのであるが、これに対し彼は私の求めに応じて、一々漢字を当て嵌めていてくれたからである。私は最初からこんな方法で中国語を習い始めたのであるが、全く暗闇同然の中国語の世界から、手探りで必要な言葉を一つ一つ拾い上げ、この大事な一語一語に対して、彼は漢字で心よく命名して

# 『書評』編集 STAFF募集!!



くれたものである。このように聴覚を通して言葉を、さらに視覚による漢字で念を押しもらうと、その言葉は何時の間にか自分の言葉になっているので、中国語でも外国語とは思えなくなる。こうなれば、その言葉を忘れることはないし、よしんば忘れていても、必要な場面に出交わすと案外自然に出てくることが体験上、多かったのである。このような私の中国語習得の体験の一端を述べたのは、そんな体験にもう一度あやかが試してみたいと思ったからである。六十年前に耳で覚えた「蘇武牧羊」の歌詞でも、今それを活字に直すとすると、そうたやすくはない。苦吟せざるを得ないのである。

さて、こんな動機を与えてくれたのは牧惠「読蘇武伝」<sup>①</sup>であった。当初、これを読んだ時歴史とは不思議なものであることを痛感したのだが、その時はこれを援用する意欲も起らなかった。今読んでみると、今年は戦後五十年に当る節目の年でもあるし、しかも「この歌の目的は私たち小学生に対して愛国心を鼓吹し、日本帝国主義の侵略に対し絶対屈服しないと決心するよう激励することであった」と述べている作者の言葉が、曾て本誌<sup>②</sup>で紹介したこの替歌の精神を代弁していることを知って、あの本歌はどうであったかを、詮索<sup>せんさく</sup>してみたくないのである。

『書評』は私たちによる文化形成のための印刷メディアです。あなたも『書評』を創ってみませんか。

「雑誌」に興味のある方、思想・文化活動をやりたい方は、『書評』編集をはじめ、講演会や映画上映のSTAFFになってみましょう。

私たちは、いつでもあなたをお待ちしています。

★連絡先

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎387-9998 (直通)

☎388-1121 (内線 4821)

ただ断わっておきたいのは、何分にも耳で聞いただけの歌である。それも六十年前となれば或は誤字・当字があるかも知れない、ご指教をお願いして、本歌（仮訳をつけておく）を披露しておきたいのである。



蘇武牧羊（蘇武 羊を放牧す）

蘇武留胡節不辱 蘇武、胡に捕るも、節まげるこ  
となし

となし

雪地又冰天

大地は雪に、大空、氷

窮愁十九年

困苦、憂愁、十九年

渴飲雪 飢呑氈

渴して雪飲み、餓えて氈呑む

牧羊北海辺

身は北海に、羊、放牧

心存漢社稷

心は常に「漢」を離れず

零落又未還

日々衰退し、未だかえれず

離境難中難

境を出ること、更にむずかし

心如鉄石堅

鉄石の、堅き心

夜坐塞上

夜独り、異郷に坐せば

時聴笳声

時に笳声の、調起り

入耳痛心酸

耳に入りて、心切なし

注

① 『随筆』一九九三年第五期（No 88）四三頁

② 『書評』一九八二年六月号通巻61号九二頁 『日本中国

ことはの来往』その10



漢字の遍歴 (3)

殷墟から出土し、甲骨文を刻した甲骨片は、約十五万個に達しており、その大部分が已に記録保存されている。この膨大な資料を解説する研究が、甲骨文発見以来九十余年間に、多くの学者や若手研究者によって進められており、現在までのところ刻辞に現れた字形分類では、その字形を異にする文字は、凡そ四千種に整理されているそうである。このうち後世の漢字とつながりをもちものとして判断されたのが一千余種。残る三千近くは未解決のままであるが、これらの文字は、その殆んどが地名・人名等の個有名詞であると思われているのである。とすれば、甲骨文が漢字の古い書体の一としてその姿を現してから、百年の節目を前にして、凡ね解説可能というところまで漕ぎつけているのである。先人が開拓してくれたこの学恩を享受しない法はない。そこでテーマを「干支」に絞って甲骨文の未知の森に分け入り、漢字のルーツを尋ねる楽しみを味わってみることにした。



図1



干支について

天干地支が見事にその全貌を現しているのは、『甲骨文集』<sup>①</sup>第三七九八六片(図二)である。これは殷墟(商朝後期、二〇代目の盤庚がBC一四〇一年国号を「殷」と称してからBC一一五四年滅亡するまでの国都城址)の甲骨文中でも最も分り易いものの一つである。

「図一」に示したのは、十干十二支、六〇組を組合せたもので「合集」は、これを「思想・文化」項目の『天文・曆法』の部に収録し、甲骨文の年代からいえば第五期<sup>②</sup>に属し、最後期に当るものである。それにしても三千年前、こんな精巧で完成された符号を作り、年月日

から時刻及び方位に至るまで、生活に節度をつける指針として、重宝していたことが分る。「図一」を漢字に置きかえると次のとおりである。

- 甲子乙丑丙寅丁卯戊辰己巳庚午辛未壬申癸酉
- 甲戌乙亥丙子丁丑戊寅己卯庚辰辛巳壬午癸未
- 甲申乙酉丙戌丁亥戊子己丑庚寅辛卯壬辰癸巳
- 甲午乙未丙申丁酉戊戌己亥庚子辛丑壬寅癸卯
- 甲辰乙巳丙午丁未戊申己酉庚戌辛亥壬子癸丑
- 甲寅乙卯丙辰丁巳戊午己未庚申辛酉壬戌癸亥

「図一」を見て、まず気付くのは十干では「甲」「丁」、十二支では「子」「巳」「午」の字形が、どうして漢字に結びつくのか不思議にさえ思われるのである。これらの疑問を解明して納得できるまで、先人たちのお世話になるが、辛抱強くついて来て欲しいのである。

「甲」と「田」

「図二」のように甲と田の二字を比べることにしよう。というのは、この二字は甲骨文においても、また商殷から周の春秋・戦国にかけての銅器銘文においても、それぞれの字形が余りにも近似しているので、それが却って



両文字の相異を明確にする効果を現していると判じたからである。だが探究の対象はあくまで「甲」を主題とする。

郭沫若は第一期の字形から判断した結果：「甲ハ魚鱗ヲ象ル」と説明するが、これをどう信じればよいのか分らない。

林義光は『説文』の一解説にある「大一經ニ曰ク、人頭ノ空（鬮體を指す）ヲ甲トナス」との説を意識したのであるか。同じく第一期の字形を評して次のように述べている。

古ハカク作レルモ人頭ニ似ズ、甲ハ皮ノ裂タルナリ、其ノ裂目ヲ象ル。

古書によれば、古代人は皮を着用して身を護る衣服としたこと（左伝・成公二年）、或は草木が芽を出す時、種子の皮をつけているさまを「甲」で現す。『斉民要術・大豆』には：「甲ヲシテ生ズ、深耕ヲ用セズ」等の文も見える。

羅振玉は秦代の小篆が「甲・田」の区別を明確にしていることに注目している。それ以前春秋・戦国時代の銅器銘文に現れる「甲・田」の紛らわしさを避けるため、甲の縦棒を長く伸して区別したのだとする。事実在即したこの考えは面白い。『説文』によれば「戎」という字

図2

楷書 吉体		甲	田
	甲 骨文	1,2期 + ⊕	田
	3,4期	⊕ ⊕ ⊕	田 田 田
	5期	田	田 田
銅器 銘文	高	+ 且甲由	田 切首
	春秋	⊕ 戎作父留殿	田 今鼎 田 田收銀
	戰國	⊕ 弭叔留殿	⊕ 留康 ⊕ 散盤
小篆		⊕ 吉文	田

は「戈とナ」から成るが、小篆では「戈と甲」から成つており「兵也、(兵は兵器)、田獵ヲ教フルニ以テ五戎ヲ習フ。五戎トハ弓矢、受、禾、戈、戟。」とあり、ここにも「甲・田」の字形に区別をつけているのが窺えるのである。

ところで『説文注』は「甲トハ万物殻ヲ破リテ出ズルヲ言フ」とし、また「孟春(初春)ノ月、天氣下降シ、



地気上昇ス、天地和合シテ、草木萌動ス（めばえる）」と説明している。

本来、甲と田とが紛らわしい字形であったことは、秦の漢字統一以前の書体を見れば一目瞭然である。しかしよく考えてみると、紛らわしいと感じるのはわれわれが「楷書」に慣れた目で見ているからであり、甲骨文時代に在っては、これらの文字が用いられる場面では、何の不都合もなかったはずである。

甲骨文に見える「甲・田」の四角な枠<sup>わく</sup>「□」及びその中にある「十」は、字形こそ同一であるが、その意味するところは異っていた。その違いはどこにあるのか。

「甲」の四角な枠は、その中にある大切な種子を保護する殻を意味していたとは思えないだろうか。だとすれば、陽春に誘われた種子がその殻を突き破って外に出るさまが「甲」の字形・字義を如実に示し、象形文字の特徴を兼備していると認めることができるのである。

一方「田」の四角な枠には二つの意味がある。(一)貴族の狩獵場。今日の御苑に当る。「韓非子」に「林ヲ焚キテ田シ、多獸ヲ儉取ス」等の例文がある。古代の狩獵場は方形であり、その枠の中の「十」は溝を現し、場内を区分していたものとみられるのである。狩獵時代のこの慣習やイメージが殷代に入って実施された井田制にも活

用されたのであろうか。(二)は田地を現す畔の枠やその仕切りを示している。「凡ソ分田ハ人口ニ照ラシ、男女ヲ論ゼス」中の「田」は田地の意味である。

因に「田」に関する通用漢字に、中国ではこの他に「畝」「佃」があり、この三字とも古代においては当初(一)狩獵、(二)農耕の意味を共有していたが、後に「田」は田地を意味し「畝」は狩獵、「佃」は小作を意味することになり、その読みも *tián* (電と同音) と変化した。「田」「畝」はともに *tián* である。

注

① 『甲骨文合集』第十二冊所収（郭沫若主編、中国科学院歴史研究所編、中華書局発行、一九八三年六月第一版、七百部中第三二〇号）

② 時代区分は董作賓の説による。第一期は盤庚から小辛・小乙・武丁まで、第二期は祖庚・祖甲、第三期は廩辛・康丁、第四期は武乙・文丁、第五期帝乙・帝辛（紂）の時期に区分している。（『商周古文字讀本』李学勤監修、刘翔等編著、語文出版社、一九八九年九月第一版、五頁）

（しばた みのる・元文学部教員）



連

載

《研究余滴》

象徴主義

15

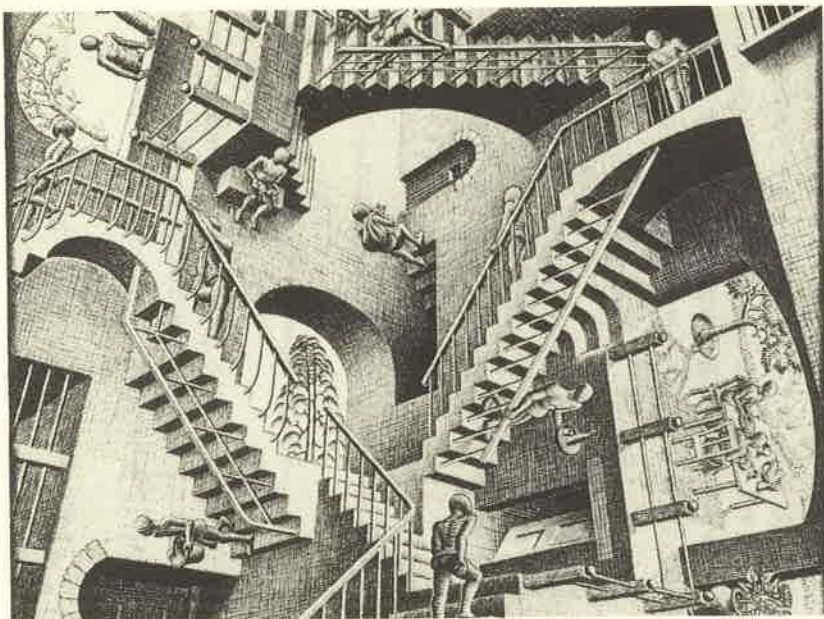
## 終章 運動の終息

山村嘉己

1

すでに前回、前々回あたりで、薄々感じられていたことと思うが、狭義の象徴主義運動は、一方では多くの拡がりを持ちながら、大きく高まることはなく、徐々に終息の様相を示していた。その拡がりをさらに一つ一つ取り上げてふれようとすれば、まだまだ逸するには惜しい詩人は何人もいる。たとえば、『ジャミスム』という呼び名まで得た自然な単純素朴な生活をそのまま詩に書きとめ、『花々の輝きと芳香、小鳥のさえずり、空の清さ、田園の散策、素朴でしとやかな乙女たちとの出会い、村

娘たちとの手軽な恋愛を享受した』（マルチノ『高踏派と象徴主義』10章）フランシス・ジャム（Francis James 1868～1938）、《象徴主義を田舎町の葉屋やブチブルの女たちの手の届くものにした》と非難された（全上）アルベール・サマン（Albert Samain 1858～1900）、その他、シャルル・ゲラン（Charles Guérin 1873～1909）、ローラン・タイヤード（Laurent Tailhade 1854～1919）、サン・ポール・ルー（Saint-Pol-Roux 1861～1940）、レモン・ルッセル（Raymond Roussel 1877～1933）など枚挙にいとまがない。といつてつぎに引くジャムの詩のように、すでに象徴主義の本義とは遠く隔たっているとしか



言いよのないものが多いのも事実である。

何日かすれば雪が降るだろう。ぼくは思い出す  
去年のことを。ぼくは思い出す 暖炉の前での  
ぼくの悲しみを。けれど、だれかが「どうしたの」  
って尋ねたって、

「何でもないさ、ほうっておいて」と、ぼくは答えた  
だろう。

先立つ年 ぼくはしっかりと考えた ぼくの部屋の中で  
そのとき 外では雪がしんと降っていた。

考えたといつて何をというわけではない。今も同じく  
パイプで琥珀こはくの切れっぱしをくゆらしているだけだ。

樫の木造りのぼくの古い家具はいつでもいい匂いだ。  
けれどぼくはあんまり変わらぬものは好きではなく  
よく知っているものを追い求めようと願うことは  
ポーズのひとつと思うから心安まることはなかった。

それならばくらはなぜ考えるのか なぜ話すのか そ  
れは変な話だろう。

涙も抱擁もそんなものは口をきかない

だけど ぼくらはそれが分かる。そして 友だちの  
足音はやさしいおしゃべりよりもっと快いのだ。

みんな星たちに名をつけた、星たちには名前など  
必要ないのだと考えもせずに。美しい流れ星が  
どんな速さで闇を切って走ったのか それを教えた  
ところで

流れ星を走らせることはできないだろう。

ところで今ではぼくの去年のいくつもの悲しみは  
いったいどこへ行ったのか。思い出すことも ほとん  
どない。

だれかがぼくの部屋に「どうしたの」と聞きに来たっ  
て、

ぼくは言うだけさ「ほっといてよ、何でもないよ」と。

(「雪が降る…」)

ここには象徴主義の片鱗もない、優しく包みこむイメ  
ージと、何よりも親密な詩の音調は《ジャミスム》その  
ものであるが。もちろん、他のジャムの詩にもっと象徴  
主義的なものは数多く見出されている。だから、象徴主  
義詩史のなかにかれを含み込むことは別に問題はない。



しかし、同時にわれわれはもう象徴主義の輪郭がもはや  
漠然としたものに解体しようとしていることも感ぜずには  
おれない。どの詩人たちも同様である。一九〇〇年ご  
ろにはこの傾向は明白なものとなって来ている。

2

ところで一方、ボードレール、ヴェルレーヌ、マラル  
メ、ランボーといった偉大な先駆者たちの開拓した広義  
の象徴主義は、むしろ、二十世紀に入って完全に文学の  
世界を蔽い包むことになる。すでに序章で紹介した人々  
の所説を借りるまでもなく、象徴主義はたんなる詩の世

## 短評募集!!



### 短評を書いてみませんか？

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれほど  
 ぜひ人にも勧めたい、または、強く印象づけられた  
 本の短評を原稿用紙(四百字詰二、三枚に)。

★ジャンルは自由、締切は毎月末。

★連絡先 千365吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎ 387-9998 (直通)

☎ 388-1121 (内線 4821)

界にとどまることなく、演劇や小説にも、さらに拡がって音楽、美術の域にまで広く深くその影響を及ぼしている。

さらに又、地域的には一フランスにとどまらず、フランス語圏やヨーロッパ近隣の諸国をも越え、アメリカ、日本などの遠い国々にまで共感の波を呼び起こした。このような大きな波動を思うとき、フランス象徴主義運動の終息とともに、まったく異質の根源的な新しい運動が始動し始めたことを感じずにはおれない。そして、それは同時に、この象徴主義詩史は自ら一つのピリオドを打つべき時を迎えたのだということを示している。もはや

人の限られた能力できわめつくせる対象ではなくなってきたということでもあろう。

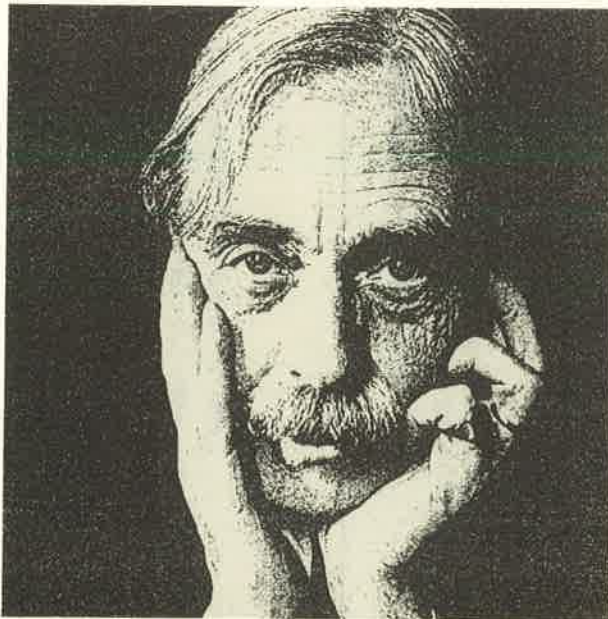
しかし、取りあえず文学の世界に限って、さらに発祥の地、フランスに限っても、自ら明確に浮かび上がる新しいいくつかの指標がある。そのことは、今、一応の終息にあたって、はっきりと指摘し、できることならば新たに力を奮ってそれらの世界の解明に挑戦することを約束して今回の仕事を閉じたいと思う。そこで問題になるのはつぎの四人の偉大な存在である。

1、ポール・ヴァレリ Paul Valéry (1871～1945)

いうまでもなくマラルメの直弟子でもあり、象徴主義の詩の系譜をもっとも正統的に引き継いだ人である。「若きバルク」*la Jeune Parque* (1919)「海辺の墓地」*le Cimetière marin* (20)などの長詩、と詩集『魅惑』*Charmes* (22)が有名であるが、「ヴァリエテ」の名で知られる文明批評もまた深い影響を人に与えた。

2、アンドレ・ジーズ André Gide (1869～1951)

小説家としての名声を恣いままにしているが、その初期の作『ナルシス論』*Traité du Narcisse* (1891)『エリヤンの旅』*le Voyage d'Urien* (93)『パリュード』*Paludes* (95)などは散文詩的で、象徴主義に深く関わっていることは明らかである。また一九三六、七年の「ソヴィエト紀行」で明らかのように、新しい社会体制への関心は、かれの文明批評がふつうのものでないことを示している。



ヴァレリ





ジード

3、マルセル・ブルースト Marcel Proust (1871～1922)

ジードを凌ぐ評価を得ている小説家であるが、かれの特色は生涯を賭けて大作『失われた時を求めて』『A la Recherche du Temps perdu (1908～22)』を書き続けたことであろう。この書には近代的な人間の本質が掩むことなく、独特の文体で展開されている。フロイトらの近代精神分析学者たちとも通じ合う無意識の世界の開拓は、一方で象徴主義の系譜と深くつながり、一方では超現実主義などの現代文学への大道を準備している。

4、ポール・クロードル Paul Claudel (1868～1955)

駐日大使であったことでも有名だが、何よりも劇作家として『黄金の頭』Tête d'Or (1889) 『人質』L'Orage (1911) 『マリヤへの告白』L'An-nonce faite à Marie (12) 『繻子の靴』Le Soulier de satin (29) などを残している。信仰の人でもあったが、ランボールの作品に深く共鳴し、その精神を継承していると考えられる。



ブルースト



クローデル

今、ここでは新しい見取図を作るために四つの指標としてあげたものの、この一人々々を研究するだけでも個人の手ではほとんど不可能とすら思われるので、その困難を予測しつつ、しかし、かれらに共通するいろいろな問題を汲み取ろうとすることが、われわれの次の目標となる。遠からず稿を改めてその力業を試みることを誓つてこの余滴は終わることにする。

(なお、次回からはしばらく少し気楽に「フランス詩の遊歩道」を執筆したいと思つている。御期待願いたい。)

(やまむら よしみ・文学部フランス文学科教員)

## 投稿募集のお知らせ

### ◎投稿募集

読者からの投稿をお待ちしています。

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文も結構です。

詳細については、生協本部3F「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

### ◎投稿規定は以下の通りです。

- ▼原稿は原則として縦書きで、「書評」誌用の字数、一行二五字、二二行（二五〇字）を一枚と計算します。
- ▼枚数は自由。（ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります。）
- ▼締め切り各月末日。
- ▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入

して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとって置いて下さい。

▼送り先

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内「書評」

編集委員会

☎ 387-9998（直通）

☎ 388-1121（内線4821）

# 「書評」編集委員

## スタッフ 大募集!

～教育文化活動という視点から、日々の世の中を～  
見据え続けています。



私たちのやっていることは  
可能性への挑戦なんです。

(活動内容：編集会議・各種テーマの学習・討論会  
編集作業・文章の執筆 etc.)

興味があれば

いつでも下記までご連絡下さい。

関西大学 組織部「書評」編集委員会  
(生協本部3階上る)

TEL(06)387-9998 (直通)



# 講演会へ行こう

## ～ 新入生歓迎講演会 ～

1. テーマ：「国民経済の黄昏」  
講師：宮崎義一氏（経済学者）  
日時・場所：4月24日(月) 千里山キャンパス
2. テーマ：「マスコミ報道を問う」  
講師：黒田 清氏（ジャーナリスト）  
日時・場所：5月22日(月) 高槻キャンパス

いつでも組合員無料！

〇くわしくは生協組織部まで〇  
06-387-9998

## 新入生歓迎セミナーへ行こう



日 時：4月8日(土)～9日(日)

テ ー マ：「アジアから見た日本」

場 所：京都伏見松林院

参加教員：千藤 洋三(法)・山村 嘉己(文)

石田 浩(経)・羽鳥 敬彦(商)

阿辻 茂夫(情)

参加要項：定員30名(先着順) 料金4,000円

交通費・宿泊費・食費込み

●不足分は生協が負担します

問い合わせ・申し込み先…生協組織部

0 6 - 3 8 7 - 9 9 9 8



編 集 後 記

毎年、関西大学は五千人以上の新入生を迎える。全年では約二万五千人の在籍者がする。しかし、学部が異なると違う学校に通っているような感じさえ受ける。千里山キャンパスの外れに存在する社会学部は「関西外大」とも呼ばれてるし、高槻キャンパスにある総合情報学部などは「関西情報専門学校」などと呼ぶ人もいる。なか、寂しさを感じる現象である。私は絶対法学部！といつて入学してきた人もいるであろうが、経済学部と商学部を受験してたまたま商学部合格したという人もいるだろうし、他大学との複数受験でたまたま合格したのが関西大学だったという人もいるだろう。

学部とか専攻という概念にとらわれてしまう必要はないはずだ。大学という空間の中に存在する既製の枠組の中に埋没してしまう必然性はないはずなのだ。

「書評」は既製の学問の枠組を一切排除し、様々なかたちで社会に起こる問題を多角的に検証してきたメディアである。今号で一〇六号を数え、学生の手で作ってきたメディアとして学内、学外を通じて活躍している。

編集委員でも、執筆者でもいいと思う。この「書評」を通じて新たな出会いがあることを私達は望んでいる。





季刊『書評』 1995年4月 通巻106号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部『書評』編集委員会  
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 〈内線4821〉 or 387-9998)  
頒 価 250円